

この目次の下線が引かれた項目をクリックすると、そのページを見ることができます。

【全体研究】

子どもたちが生き生きと輝く授業の創造  
～ 学力向上を図る望ましい学習指導の在り方 ～

I	<u>研究の概要</u>	
1	<u>研究主題</u>	1
2	<u>主題設定の理由</u>	1
3	<u>研究目的</u>	1
4	<u>研究仮説</u>	2
5	<u>研究経過</u>	2
6	<u>研究の全体構想</u>	3
II	<u>研究の実際</u>	
1	<u>本研究の基本的な考え方</u>	4
	(1) <u>「子どもたちが生き生きと輝く授業」のとらえ方</u>	4
	(2) <u>「授業力」のとらえ方</u>	5
2	<u>子どもたちが生き生きと輝く授業づくり</u>	9
	(1) <u>主体的な問題解決や学び合いについて</u>	9
	(2) <u>単元指導計画の工夫</u>	10
	(3) <u>学習指導における手立て</u>	15
	(4) <u>子どもたちが生き生きと輝く「授業づくりマニュアル」の作成</u>	22
3	<u>子どもたちが生き生きと輝く授業の実践</u>	27
	(1) <u>小学校における実践例</u> （小学校第4学年 算数科）	27
	(2) <u>中学校における実践例</u> （中学校第1学年 技術・家庭科）	32
	(3) <u>高等学校における実践例</u> （高等学校第1学年 国語科）	37
III	<u>研究の成果と課題</u>	
1	<u>成果</u>	42
2	<u>課題</u>	42
	〈 <u>参考文献</u> 〉	42

## I 研究の概要

### 1 研究主題

# 子どもたちが生き生きと輝く授業の創造

～ 学力向上を図る望ましい学習指導の在り方 ～

### 2 主題設定の理由

近年の高度情報化や国際化にともない、情報が多様化し、社会の情勢はさらに複雑になってきた。このような21世紀は「知識基盤社会」の時代と言われ、これからの未来を生き抜くために、様々な知識・技能を習得し、それを活用する力を養うことがますます重要になっている。

平成15年、「生徒の学習到達度調査」(PISA2003)の結果が公表され、「内容を理解し、利用し、熟考する」ことに必要な思考力・判断力・表現力等の不足が指摘されるようになった。その後、中央教育審議会より「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」(平成17年)が出され、「『確かな学力』を育成し、『生きる力』をはぐくむという基本的な考え方は、今後も引き続き重要である。」という学校教育の基本理念が、再度、提言された。また、いくつかの答申を経て改訂された今回の学習指導要領でも、「生きる力」をはぐくむことが重要であるとして、「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自ら問題を解決する資質や能力等」を含めた「確かな学力」の必要性が述べられている。

さらに、本県が進めている「宮崎ならではの教育」においても、学力向上を図るために、知への興味・関心を高めながら、各教科等における基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、「確かな学力」を身に付けさせていくことがねらいとされている。

本県の児童生徒の学力と意識の実態については、宮崎県教育委員会から「みやざき小中学校学力調査」の分析結果が公表されている。これによると、小・中学校のほとんどの教科で、思考力・判断力・表現力等を必要とする応用的な問題について、到達度が低い傾向がみられた。また、平成19年度の分析では、「『好きな教科』『わかる教科』の割合を増やすことが学力の向上につながる。児童生徒が教科を好きになるように、わかる授業の実践が今後も重要である。」とある。この分析は、児童生徒の学力の向上と意欲や達成感・充実感が、大きく関係しているということを意味している。

以上のことをふまえ、宮崎県教育研修センターでは、研究員研修の全体研究として、平成17年度から、「子どもたちが生き生きと輝く授業」を創造するために、学力の向上を図る望ましい学習指導の在り方について研究を進めてきた。これまでの研究では、まず、めざす児童生徒像や授業像を明確にするとともに、授業を設計し展開するための「授業力」について、理論を確立した。そして、理論をもとに、調査・分析することで、課題を明確にした。さらに、その課題を改善するために、授業実践と検証を行った。そこで今年度は、これまでの理論研究と調査研究をもとに、主題に迫る授業づくりの方策をマニュアルとしてまとめ、小・中・高それぞれの学校で授業実践を行い、学力向上を図る望ましい学習指導の在り方についてまとめることにした。

このように、「子どもたちが生き生きと輝く授業」を創り出していけるようにすることで、本県の学習指導における課題改善に寄与できるのではないかと考え、本研究主題を設定した。

### 3 研究目的

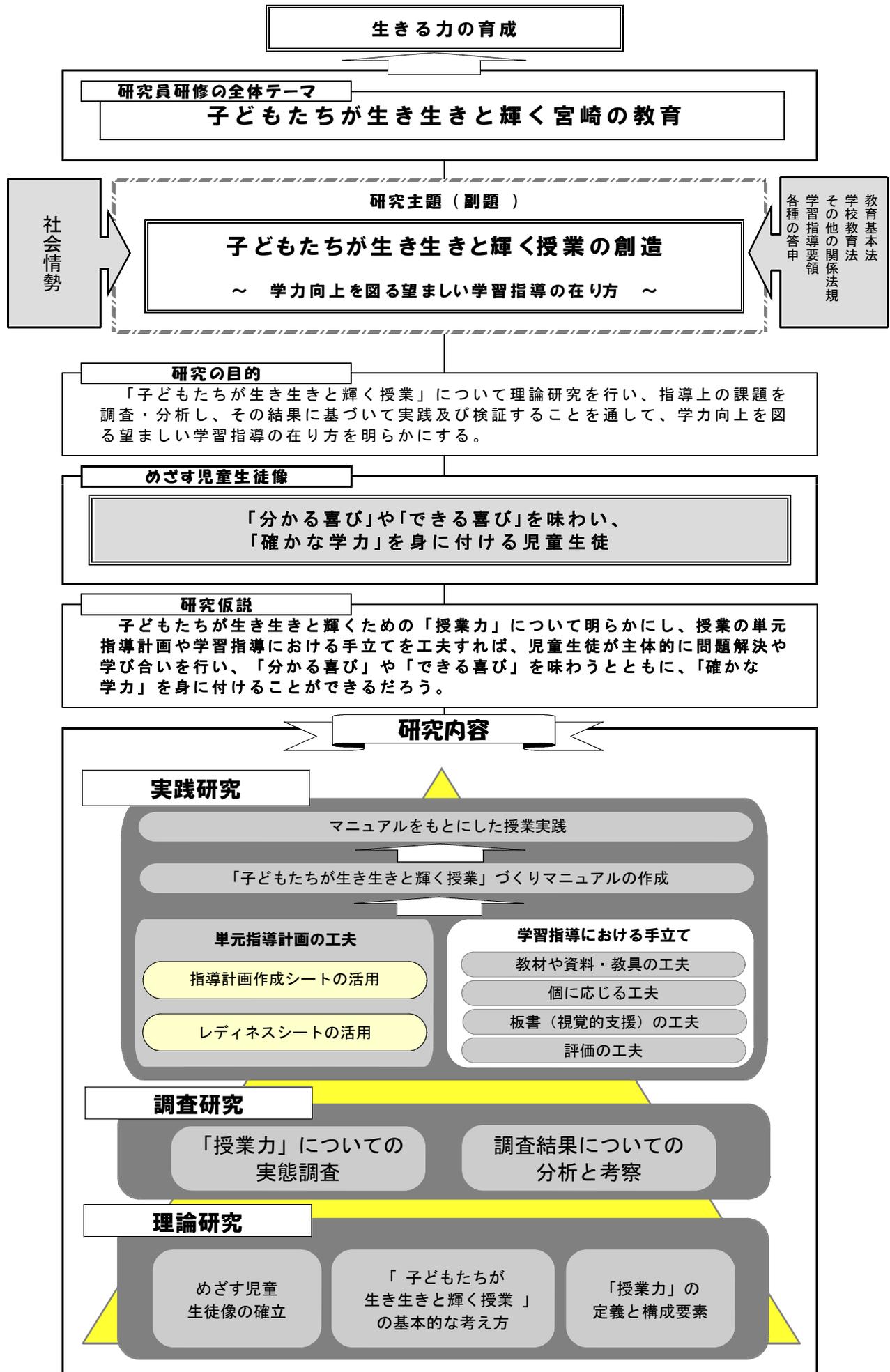
「子どもたちが生き生きと輝く授業」について理論研究を行い、指導上の課題を調査・分析し、その結果に基づいて実践及び検証することを通して、学力向上を図る望ましい学習指導の在り方を明らかにする。

#### 4 研究仮説

子どもたちが生き生きと輝くための「授業力」について明らかにし、授業の単元指導計画や学習指導における手立てを工夫すれば、児童生徒が主体的に問題解決や学び合いを行い、「分かる喜び」や「できる喜び」を味わうとともに、「確かな学力」を身に付けることができるだろう。

#### 5 研究経過

【年 度】	【研究の目標】	【研究の内容】
平成17年度	「子どもたちが生き生きと輝く授業」についての理論を構築する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 理論研究（めざす授業像・「授業力」に関する理論構築）</li> <li>○ 調査内容と項目の検討</li> </ul>
平成18年度	「授業力」に関して、県内の各学校の実態をとらえ、分析する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 理論研究（前年度構築理論の深化）</li> <li>○ 調査内容と項目の検討</li> <li>○ 調査研究（「授業力」にかかわる各学校の実態把握）</li> <li>○ 調査結果の分析と考察</li> </ul>
平成19年度 ----- 平成20年度	「子どもたちが生き生きと輝く授業」を具現化する学習指導の在り方を究明する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 実践研究（小・中学校での授業検証）</li> <li>○ 検証授業の分析と考察</li> </ul>
平成21年度 (本年度)	5年間の研究のまとめを行い、成果と課題を明らかにする。 (実践対象は平成21年度センター研究所属校)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 過去4年間の研究内容の確認</li> <li>○ 研究の全体構想の見直し</li> <li>○ レディネスシートと指導計画作成シートの作成</li> <li>○ 授業づくりマニュアルの作成</li> <li>○ 「子どもたちが生き生きと輝く授業」の実践 <ul style="list-style-type: none"> <li>◇小学校第4学年 算数科◇ 単元名 「はしたの大きさの表し方を考えよう（小数）」</li> <li>◇中学校第1学年 技術・家庭科◇ 単元名 「設計」</li> <li>◇高等学校第1学年 国語科◇ 単元名 「鶏口牛後」</li> </ul> </li> <li>○ 研究の成果と今後の課題の整理</li> </ul>



## II 研究の実際

### 1 本研究の基本的な考え方

#### (1) 「子どもたちが生き生きと輝く授業」のとらえ方

##### ① めざす児童生徒像について

学習指導要領の改訂により、今後も「生きる力」をはぐくむことの必要性が示され、それを支える「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和が重視された。また、本県の「宮崎ならではの教育」においても、学力向上を図る指導として、知への興味・関心を高めながら、各教科等における基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、知識や技能を身に付け、それを活用する力、学ぶことへのやる気・意欲、自分で考える力、自分で判断する力、自分で表現する力、問題を解決し自分で道を切り拓いていく力などの「確かな学力」を身に付けさせていくことが、重要課題とされている。

さらに、本県の児童生徒の実態としては、「みやざき小中学校学力調査・意識調査」（平成19年度）の結果から、児童生徒の思考力・判断力・表現力の不足や、授業における達成感・充実感の必要性が明らかになっている。

そこで、学力の向上を図るには、授業を通して、児童生徒が「分かった」「できた」という達成感・充実感を味わいながら、「確かな学力」を身に付けていくことが不可欠であると考えた。

このことから、「子どもたちが生き生きと輝く授業」において、めざす児童生徒像を、次のように設定した。

**【 めざす児童生徒像 】**  
「分かる喜び」や「できる喜び」を味わい、「確かな学力」を身に付ける児童生徒

##### ② 「子どもたちが生き生きと輝く授業」について

児童生徒が「分かる喜び」や「できる喜び」を味わい、「確かな学力」を身に付けるには、児童生徒が主体的に活動し、お互いの良さを生かし合うような授業を、展開しなければならない。また、「確かな学力」では、問題を解決する力等を高めることも重視していることから、1つの学習課題に対して、児童生徒が自ら考え、試行錯誤し、最後までやり抜くようにすることも大切になる。

そこで、「子どもたちが生き生きと輝く授業」として、授業像を次のように設定した。



(2) 「授業力」のとらえ方

① 「授業力」の定義と構成要素

児童生徒が生き生きと輝くためには、まず「児童生徒が『分かる』『できる』授業」を行う必要がある。そこで、「子どもたちが生き生きと輝く授業」を構築するにあたって、「児童生徒が『分かる』『できる』授業」を実践する力を、「授業力」と定義し、求められる教師の技能等について整理した。

授業づくりには、計画、実践、評価といった3つの段階がある。この3つにはつながりがあり、どれか1つが不足しても、「分かる」「できる」授業を継続することは困難である。そこで、「授業力」を構成する要素を、下の3つの過程ととらえ、「実態把握力」「授業設計力」「授業展開力」と設定した。(図1)

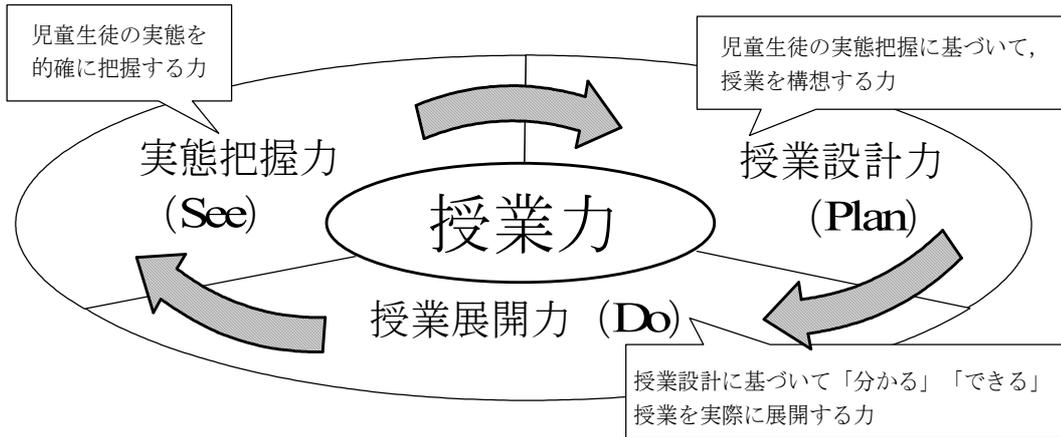


図1 「授業力」の定義と構成要素

② 「授業力」を構成する基本的な教師の技能等

図1の「授業力」の定義と構成要素を基に、「実態把握」「授業設計」「授業展開」の各場面における基本的な教師の技能等について分類・整理し、さらに具体的にまとめた。

ア 実態把握力

実態把握力については、児童生徒の実態を、「学習内容への興味・関心」「学習状況」「学び方」「生活経験」の4点から把握することが大切であると考えた。

また児童生徒の実態把握は、単元や1単位時間を通して適切に行われなければならないため、項目や観点においても、さらに「授業前」「授業中」「授業後」の各場面における具体的な内容を示した。

授業力	項目	観点	内容
実態把握力	実態把握	学習内容への興味	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科への興味・関心の状況を具体的に把握している。</li> <li>・本教材への興味・関心の状況を具体的に把握している。</li> </ul>
		学習状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>【授業前】・学習の基礎となる事項の定着度を具体的に把握している。</li> <li>【授業中】・評価計画に基づいて、学習状況を具体的に把握している。</li> <li>【授業後】・目標への到達度を具体的に把握している。</li> </ul>
		学び方	<ul style="list-style-type: none"> <li>【授業前】・学習方法や形態などの、これまで経験したことのある学習の仕方(グループ学習やコンピュータを使った学習など)を具体的に把握している。</li> <li>・学習への取組の姿勢(学習習慣、態度等)を把握している。</li> <li>【授業後】・本単元での学習の仕方(グループ学習やコンピュータを使った学習など)の定着状況を把握している。</li> </ul>
		生活経験	<ul style="list-style-type: none"> <li>【授業前】・本単元学習に関する生活経験の状況を具体的に把握している。</li> </ul>

## イ 授業設計力

授業設計力は、児童生徒の実態把握に基づいて授業を構想する力であり、教材分析、教材開発にかかわるものとして「教材」、児童生徒の実態把握に基づく目標設定、単元の評価計画、指導計画として「計画」、具体的な授業改善の計画として「学習活動」、授業を支える学習環境づくりとして「環境」という項目を設定した。

授業力	項目	観 点	内 容
授 材	教材	教材分析	・教材を分析し、教材のもつ特性を的確にとらえている。
		教材化・教材開発	・児童生徒の能力や興味・関心等に合った教材、地域素材を生かした教材を開発している。
計 画	計画	目 標	・学習指導要領と単元との関連を明確にとらえ、目標設定をしている。
		指 導 計 画	・児童生徒の実態や学校の特性に応じた指導計画や学習指導過程の工夫をしている。 ・「げんこ」をそろえるために、既習事項の復習等の時間を単元の中に設定している。
		評 価 計 画	・場面や方法を明確にした評価計画を立てている。
学 習 活 動	学習活動	学 習 課 題	・目標及び指導計画に基づいて学習課題を設定している。
		教 材 ・ 教 具	・効果的な資料や教具等を準備、工夫している。
		発 問	・児童生徒の思考を促す発問を考えている。
		板 書	・効果的な板書になるよう工夫している。
		場 ・ 形 態	・学習の場や学習形態の工夫をしている。
環 境	環境	学習環境の整備	・主体的な学習を促す学習資料（常掲資料等）の整備や学習環境づくりに心がけている。

## ウ 授業展開力

授業展開力とは、授業設計に基づいて、「分かる」「できる」授業を実際に展開していく力のことであり、教育への情熱や感性等の心理的な側面から迫る「使命感」と、表現力や統率力等の技術的側面から迫る「指導技術」の大きく2つの項目を設定した。また、授業展開力は、教師の指導力が児童生徒を前にした授業の具体的な場面で発揮されることから、それらの項目をさらに大観点と小観点に分けて具体的な内容を示した。

授業力	項目	観 点	内 容	
授 命 感	使命感	目標に到達させる意欲	・全ての児童生徒が学習の目標に到達できるように心がけ、授業にのぞんでいる。	
		児童生徒理解	・児童生徒一人一人に気を配り、学習意欲や学習状況（言動、反応、変化等を含む）を共感的に受け止めている。	
		コミュニケーション能力	・視線や児童生徒との距離に気を配りながら、授業の中で対話や交流を積極的に行っている。	
指 導 技 術	指導技術	表現する力	説明・指示	・児童生徒の実態に応じて、分かりやすく的確に説明・指示をしている。
			発 問	・児童生徒の実態に応じて、分かりやすく的確に発問をしている。
			応 答	・共感したり、補足したりしながら多くの児童生徒の発言を取り上げている。
			板 書	・児童生徒の実態に応じて、分かりやすく的確に板書をしている。
開 発 力	開発力	生かす力	教材・教具の活用	・児童生徒の実態に応じて、効果的に教材・教具を活用している。
			学習習慣の活用（学習訓練）	・学習のきまり（ルール）を決め、それを意識させながら授業を進めている。
		伸ばす力	個に応じた指導	・目標の到達状況に応じて、補充的な指導や発展的な指導を展開している。
		まとめる力	指導の修正・変更	・児童生徒の実態に応じて、指導内容や指導方法、時間配分等を柔軟に調整している。
評 価 力	評価力	学習の総括	・学習課題に対するまとめを、分かりやすく的確に行っている。	
		評 価	・評価計画に基づいて、学習状況を的確に評価している。	

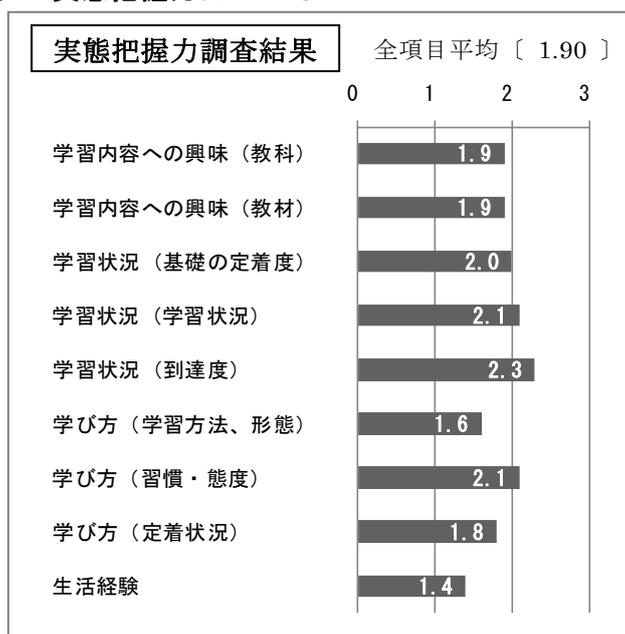
### ③ 「授業力」についての実態調査

本調査（平成 18 年度実施）は、「授業力」に関わる教師の意識や実態をとらえ、子どもたちが生き生きと輝く授業を構築するために、工夫・改善すべき技能等を焦点化することを目的として、平成 17、18 年度宮崎県教育研修センター研究員の所属校（小・中学校計 18 校 206 名）の教諭を対象に行った。

### ④ 調査結果の分析と考察

「授業力」についての調査結果から、教師の意識や実施状況を分析し、以下のように考察した。なお、調査結果の集約は、各項目の自己評価を点数化し、それぞれの平均値をグラフ化する方法で行った。点数化については、「常にしている…3」「時々している…2」「あまりしていない…1」「していない…0」とした。

#### ア 実態把握力について



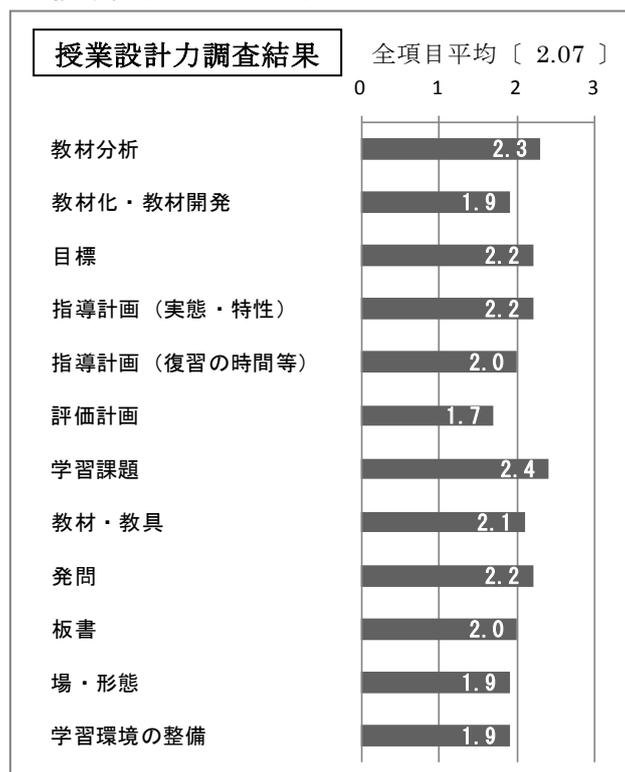
#### 【分析】

- 「学習内容への興味」に対する把握は、「常にしている」が 20%弱である。
- 「学習状況」に対する把握は、他の項目に比べて高い結果である。中でも、目標への到達度の具体的把握は、「常にしている」「時々している」を合わせると 90%である。
- 「学び方（学習方法、形態）」及び「生活経験」に対する把握は、全項目平均と比較して低い傾向にある。

#### 【考察】

授業づくりにおいては、目的に応じて学習方法や形態、生活経験についての実態を把握することも必要であり、児童生徒の実態を効率的に把握できるような方法を工夫することが必要だと考える。

#### イ 授業設計力について



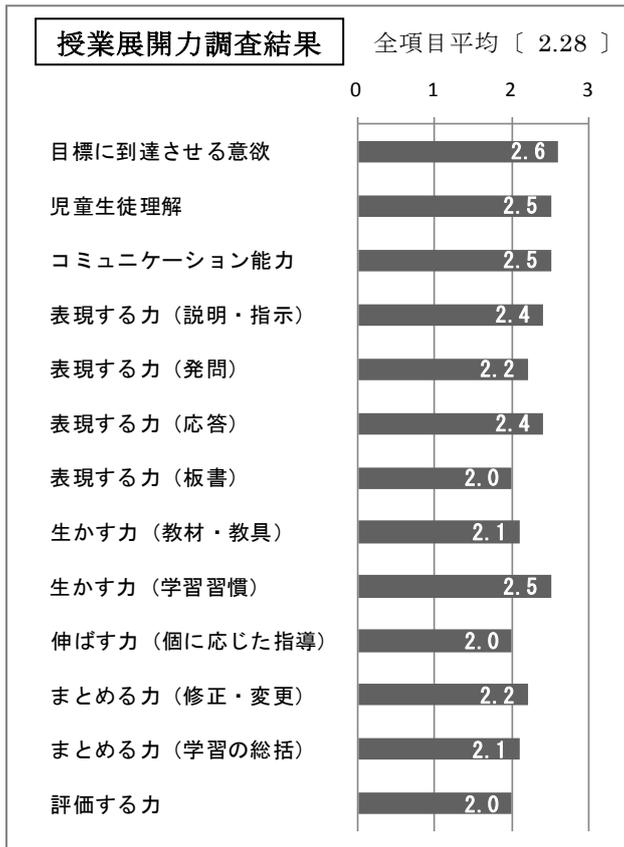
#### 【分析】

- 「教材分析」についての自己評価は高く、約 90%が「常にしている」または「時々している」と回答しているのに対し、「教材化・教材開発」については、やや消極的である。
- 「評価計画」については、実施状況があまり思わしくない。
- 「板書」や「場・形態」の工夫、「学習環境の整備」については、やや低い傾向が見られる。

#### 【考察】

授業準備にあまり時間をかけられないという現実がうかがえる。よって、教材開発や評価計画、板書や形態、学習環境等について、より効率的で効果的な方法を工夫していく必要がある。特に教材開発や評価計画については、授業展開に大きくかかわる要素であり、重要な課題と捉えることができる。

## ウ 授業展開力について



### 【分析】

- 「表現する力」は、全体的に高い結果であるが、「板書」についてはやや低い結果となっている。
- 「生かす力」のうち「学習習慣の活用」については、90%以上の教師が「常にしている」「時々している」と答え、学習訓練に力を入れていることが分かる。逆に「教材・教具」については、他の項目と比べて低く、小学校よりも中学校の方が効果的に活用しているという回答も得られた。
- 「個に応じた指導」を「常にしている」と答えた割合は、20%に満たないが、「時々している」まで含めると80~90%になる。
- 「評価する力」が低い傾向にある。
- 総じて「実態把握力」「授業設計力」と比較すると、「授業展開力」に関する自己評価は高い。

### 【考察】

一人一人の児童生徒が目標を実現できるように努力している様子が見える。教材・教具の効果的な活用や的確な評価、板書等については、さらに充実させていく必要がある。

以上のような調査結果についての分析と考察を踏まえると、子どもたちが生き生きと輝く授業を構築するためには、特に次のような課題の解決が必要であると考え、年次的に研究を進めてきた。

- 単元の指導計画段階で、目的に合わせて、様々な観点から児童生徒の実態を把握すること。
- 学習指導において、教材や資料・教具を工夫すること。
- 学習指導において、個に応じる工夫をすること。
- 学習指導において、板書を工夫すること。
- 学習指導において、評価を工夫すること。

本年度は、これまでの研究成果をまとめるとともに、上記の課題解決を図るための研究内容を再構成し、「単元指導計画の工夫」「学習指導における手立て」の2つを実践研究の柱とした。単元指導計画段階での実態把握の仕方や効率的な計画作成の方法について研究し、指導の目標を実現するための効果的な手立てを工夫していくことによって、児童生徒の興味・関心を高め、「分かった」「できた」という達成感・充実感を味わわせる授業を構築することができるものと考えた。

## 2 子どもたちが生き生きと輝く授業づくり

子どもたちが生き生きと輝く授業づくりのために、まず、児童生徒が主体的に問題解決や学び合いを行うような学習指導過程を考え、その中で「調査結果の分析と考察」で挙げられた課題を解決する手立てを、考えていくことにした。

### (1) 主体的な問題解決や学び合いについて

児童生徒が、主体的に問題解決や学び合いを行うためには、児童生徒が「なぜ」と思う場面を、数多く取り入れ、児童生徒自らが主体的に答えを見出していく場を設定する必要がある。そして、このような場の中で、児童生徒はお互いの良さを認め合い、自己存在感や自己有用感を味わい、生き生きと輝くのである。本研究では、児童生徒が問題解決や学び合いを行い、思考力・判断力・表現力を伸ばすとともに、基本的な知識・技能を身に付けることができるよう、1つの学習課題に対して、単元もしくは一単位時間等のサイクルで、問題を解決する流れをとった。

具体的には、まず、全体で学習課題を確認する。学習課題については、児童生徒が設定するものと、教師主導で提示するものの両方が考えられる。学習課題を確認した後、一人調べを行い、自らの考えをもつ。その後、グループや全体へと活動を広げ、問題解決に向けて考えを練り上げていく。最後に、学習を振り返るとともに、新たな問題意識をもつ。



基本的な学習課題解決の流れ

(2) 単元計画作成における工夫

① 指導計画作成シートによる単元計画

児童生徒が主体的に問題解決や学び合いをしていくためにも、単元全体を見通した具体的な計画を立てることが大切だと考えた。そこで、単元計画作成における工夫として、「指導計画作成シート」【資料1】(フォーム【資料2】)を作成した。これを活用することで、単元全体を通しての目標や意義を十分に理解し、実態に即した指導方法や具体的な手立て・評価計画等を、効果的かつ効率的に計画できるようにした。作成に当たっては、以下の3つの手順で作成していった。

【資料1】 指導計画作成シートの例

指導計画作成シート

学年	小4年	教科名	算数	単元名	はしたの大きさの表し方を考えよう(小数)	時数	8時間
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 小数の良さに気付き、進んでこれを用いる。</li> <li>○ 小数のしくみや整数の計算をもとにして、小数の加法・減法の計算の仕方を考え、自分の考えを説明することができる。</li> <li>○ 小数を用いてはしたを表したり、数直線上に小数を表したりすることができる。また、小数の加法・減法の計算ができる。</li> <li>○ 小数の意味や表し方、大小関係、加法・減法の計算の仕方が理解できる。</li> </ul>						
学習指導要領の指導内容	小数の意味とその表し方について理解するとともに、小数の加法及び減法の意味について理解し、それらを用いることができるようになる。 ア 端数部分の大きさを表すのに小数を用いること。また、小数の表し方及び10分の1の位について知ること。 イ 小数が整数と同じ仕組みで表されていることを知るとともに、数の相対的な大きさについての理解を深めること。 ウ 10分の1の位までの小数の加法及び減法の計算の仕方を考え、それらの計算ができること。						
単元の意義	10進法や加減の計算法を小数まで拡張できるようになり、1に満たない数を表すことができる。進んで生活や学習の中で、小数の表記や加減の計算を活用するようになる。						

ア 単元目標の設定と期待する児童生徒の姿

	興味・関心		学習の仕方	学習への取組	生活経験	基礎となる事項の定着度		
	教科	教材						
児童期待する姿	算数の学習が好きである。	数の仕組みの学習や計算に進んで取り組む。	分からないことを進んで尋ねたり、分かったことを友だちに教えたりする。	自ら解決方法を考え、発表することができるようになったら、進んで練習問題に取り組む。	生活の中の小数に気付く。数や計算を進んで生活の中で活用する。	10進法が理解できている。	2位数の加法・減法の筆算ができる。	長さ・かさ・重さの単位換算ができる。

イ 的確な児童生徒の実態把握

レディネスシート (対象1組27名)								
児童生徒の実態	算数の学習を多くの児童が好きであるが、あまり好きでない児童が3名いる。	多くの児童が数の仕組みの学習や計算が好きである。数の仕組みや計算を好まない児童が5～6名いる。	友だちに教えた、教えられたりすることを多くの児童が好きであるが、あまり好きでない児童も2名いる。	自分でやり方を考えて問題に答える多くの児童が好きであるが、積極的に発表する児童は偏っている。	小数は未習であるが、生活の中の小数に気付いている児童が9名いる。	何百何十は「100を口こ、10を口こ合わせた数」「10を口こ集めた数」という問いに、両方とも間違えた児童が5名、1問間違えた児童が7名いる。	たし算や繰り下がりのないひき算の筆算は大体できている。繰り下がりが1回・2回のひき算の筆算を間違えた児童がそれぞれ7～8名(どちらも間違えた児童は3名)いる。	長さ・かさ・重さの3つとも単位換算ができた児童は9名だった。全て間違えた児童が2名いる。

分析

課題	a		b		c		d		e		f
課題	苦手意識から、算数の学習自体や、数と計算の学習があまり好きでない。		できないことを気にして、友だちに教えられることが好きでない。		自力解決に自信が持てない。自分の考えに自信が持てない。		未習なので生活の中の小数に気付いていない。		10進法の仕組みが理解できていない。また、繰り下がりのあるひき算の筆算ができない。		長さ・かさ・重さの単位換算ができない。
対応	支援や協力学習等により、「できた」と実感させるとともに、学習への取組を賞賛する。		つまずきの多い児童には、できるだけ教師が個別に支援を行うようにする。		解決の見通しを持たせるとともに、既習事項を活かすように助言する。考えることが大切で、間違えても構わないことを伝える。		単元に入ってから生活の中の小数を見つけた活動を入れる。		単元導入時や授業の導入に必要な事項を押さえる。また宿題や朝学習などで練習させた時、必要に応じて授業外の時間に個別指導を行ったりする。		授業の導入時などにフラッシュ型教材等を使って復習させる。

ウ 課題の対応策立案と指導計画への位置づけ

小単元	時数	学習課題(本時の目標)	主な学習内容	評価計画			対応	
				関	考	表		
1 はしたの大きさの表し方	1	「.」のある数に関心を持つ。整数・小数の意味を理解し、はしたのかさを小数で表すことができる。	・はしたのかさの表し方による小数の動機付け ・小数による量の表し方、小数、整数の意味	○	○	○	a b e f	
	1	はしたの長さや重さを小数で表すことができる。身の回りで使われている小数を探し出すことができる。	・長さや重さなどの小数表示、複数名と小数	○	○		a b c d e f	
2 小数の大きさ	1	10進法をもとにした小数のしくみが分かる。	・小数のしくみと相対的見方、大小比較と数直線			○	a b c e	
	3 小数のたし算・ひき算	1 (本時)	小数のたし算・ひき算の意味を理解し、簡単な小数のたし算・ひき算ができる。	・0.1のいくつ分の考えによる小数の加減の仕方 ・小数のたし算の筆算の仕方		○		a b c e
		1	小数のひき算の筆算ができる。	・小数のひき算の筆算の仕方		○		a b c e
4 復習	2	単元を振り返る。	・復習		○	○	a b c e	

## ア 単元目標の設定と期待する児童生徒の姿の明確化

単元の目標を設定する際には、各教科の観点ごとに示された評価規準について、学習指導要領はもちろん、単元の意義（この単元を通して養うことができる社会的な資質や能力・態度）を位置付け、これらに関連づけるようにする。指導者は、児童生徒の主体的な問題解決と学び合いを促すとともに、常にこの「単元の意義」を念頭に置き、指導をしていくようにする。

さらに単元の目標をもとに、「興味・関心」「学習の仕方」「学習への取組」「生活経験」「基礎となる事項の定着度」等について「期待する児童生徒の姿」を明確に記す。指導者はこの「期待する児童生徒の姿」に迫るべく、具体的な支援を考えていく。

学年：中1年	教科名：技術・家庭科	単元名：設計	時数：13時間
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 身の回りの生活を向上させるために、製作に必要なことを進んで調べ、構想しようとする。</li> <li>○ 使用目的や使用条件に即した機能と構造を理解し、作品を創意工夫する。</li> <li>○ 構想の表示方法と、製作図の描き方を理解し、製作図を描く。</li> <li>○ 加工、接合、仕上げの方法を理解し、部品図を描く。</li> </ul>		
学習指導要領との関連	実践的・体験的な学習を通して、材料と加工に関する基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、技術と社会や環境とのかかわりについて理解を深め、技術を適切に評価し活用する能力と態度を育てる。		
単元の意義	知識と技術の習得とともに、知的財産を尊重する倫理観、緻密さへのこだわりや忍耐強さなどの育成につながる。		

	興味・関心		学習の仕方	学習への取組	生活経験	基礎となる事項の定着度		
	教科	教材				材料の特徴が言える。	分数のかけ算ができる。	縮小の計算ができる。
児童生徒の姿	生活と技術との関わりについて理解を深め、進んで生活を工夫する。	ものづくりが好きである。	グループでよりよい話し合い活動をしたり、コンピュータを活用したりすることができる。	技術室での約束を守り、互いに協力しながら安全に活動することができる。	のこぎりや金づちを使って、簡単な木材加工をしたことがある。			

これらの項目について実態調査へ

## イ 的確な児童生徒の実態把握

次に、児童生徒がその単元の学習を進めていく際に関わる、既習事項の定着状況や生活経験等の実態みるために、レディネス（学習準備）調査を行う。

レディネス調査の結果から、児童生徒の実態を「期待する児童生徒の姿」の項目に即して把握でき、そこから課題を分析することができる。

（レディネス調査については、後の「②単元計画におけるレディネスシートの活用」で詳しく述べる。）

	興味・関心	学習の仕方	学習への取組	生活経験	基礎となる事項の定着度			
児童生徒の実態	意欲的に活動はするが、進んで生活を工夫し、創造しようとする生徒が少ない。	ものづくりの経験が少なく、ものをつくる喜びを知らない生徒が多い。	コンピュータを使う経験は多いが、話し合い学習の経験は少ない。	技術室での約束は守られており、友だちと協力して活動することができる。	のこぎりや金づちを使った経験のある生徒が少ない。	材料の特徴が理解できていない生徒が8人いる。	分数のかけ算が理解できていない生徒が5人いる。	縮小が理解できず、計算できない生徒が16人いる。
<b>分析</b>	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	
課題	生活を創意工夫しようとする意識が薄く、ものづくりをする喜びや意義を感じる機会が少ない。	充実した話し合い活動をするのが難しい。	危険予知をし、常に安全に活動しようとする意識が薄い。	工具を正しく使えない児童が多い。	材料の特長の理解が不足している。	分数のかけ算を理解していない児童がいる。	図の縮小の計算ができない児童が多い。	

## ウ 課題の対応策立案と指導計画への位置づけ

続いて、レディネス調査から分析した課題を解決するための対応策を考えていく。この対応策は、実際の授業の中で行っていくことになるため、できるだけ具体的に記述していく必要がある。また、これらの対応策はアに述べた「単元の目標」や「期待する児童生徒の姿」に迫ることができるものにする必要がある。

この実践では、小单元ごとの指導計画（学習課題・学習内容・時数・評価計画）を作成していくが、これらの対応策を、単元の中のどの場面（小单元）で重点的に実施していくかについて併せて位置づけていくようにした。

レディネス調査から分析した課題							
	興味・関心	学習の仕方	学習への取組	生活経験	基礎となる事項の定着度		
	a	b	c	d	e	f	g
対応	身近な題材を用いて、生活に生かされている技術に触れさせる。創意工夫するものになる知識を指導する。	話し合いの進め方を示す。	常設掲示を活用して、毎時間約束事を確認する。	工具の使い方を図に示して説明する。常設掲示も活用する。	時間をとって、復習する時間を設ける。ワークシートを工夫する。	ヒントカードを活用したり、個別指導を行ったりする。	演習を行う時間や小テストを行う時間を設ける。

単元のどこで、これらの対応策をとるか位置づける。

小单元	時数	学習課題（本時の目標）	主な学習内容	評価計画				対応
				関心・意欲	創意工夫	技能	知識・理解	
設計の進め方	0.5	設計の進め方を理解する。	～	○			○	a
製作品の決定	1.5	使用目的や使用条件を考えて、作りたいものを考える。	～		○			
機能	1	使用目的や使用条件に即した形状や寸法、使いやすさを工夫する。	～		○		○	
じょうぶな構造	1	使用時に加わる荷重を考え、じょうぶな構造を考える。	～	○			○	a b c d
材料の選定	1	使用目的、使用条件に合った材料を選ぶ。	～				○	e
構想図	1	立体をキャビネット図で表す。	～	○		○		a
	1	立体を等角図で表す。	～			○		
	0.5	縮小の仕方、計算を理解する。	～				○	f g
	3.5	作りたいものの構想図を描く。	～	○	○	○	○	a f g
部品図	2	第三角法で部品図を描く。	～			○		

評価計画は、その小单元で重点的に評価していく項目を選択するようにした。

1 単位時間の、学習指導過程中の「指導上の留意点」につなげる。

これまでの手順を行えば、単元目標から実際の指導まで、この単元でめざす児童生徒の姿に対して、実態とどのようなギャップがあり、そのためにどういった対応策をどの場面で施していくのが明確にわかる単元指導計画ができあがる。

これを活用することで、指導者の「授業力」である「実態把握力」「授業設計力」が高まり、児童生徒が「分かる喜び」「できる喜び」を感じられ、確かな学力が身につく学習指導を展開する「授業展開力」の向上につながっていくと考える。

【資料2】 指導計画作成シート例（フォーム）

指導計画作成シート

学年	年	教科名	単元名	時数	時間
単元の目標					
学習指導要領の指導内容					
単元の意義					

	興味・関心		学習の仕方	学習への取組	生活経験	基礎となる事項の定着度				
	教科	教材								
児童期待する姿										
レディネスシート (対象)										
児童生徒の実態										

分析

課題									
対応	a	b	c	d	e	f	g	h	

小題材	時数	学習課題(本時の目標)	主な学習内容	重点評価			対応
				関	意		

② 単元計画におけるレディネスシートの活用

レディネスを把握して「指導計画作成シート」に生かせるように、「レディネスシート」【資料3】を作成した。

「レディネスシート」の問いは、①アで述べた「期待する児童生徒の姿」の5観点に対応するように作成した。特に、その学習を進めるに当たっての既習事項「基礎となる事項の定着度」については、具体的な問題を解かせて、正答率のみならず、つまずきの原因や傾向まで分析する必要がある。

これら进行分析することにより、児童生徒の実態を的確に把握し、単元の指導計画に生かすとともに、具体的な対応策を考えていくことができる。

【資料3】 「レディネスシート」の例（中学校第1学年 技術・家庭科「設計」）

レディネスシート		年 組 番(名前)
	問	回答
学習全般に関すること	1 自分の生活を便利にするために工夫することに興味がありますか。	ア たいへんある イ ある ウ あまりない エ ない
	2 ものづくりに興味がありますか。	ア たいへんある イ ある ウ あまりない エ ない
	3 各教科の授業でグループで話し合い活動をしたことがありますか。	ア よくある イ ある ウ あまりない エ ない
	4 各教科の授業でコンピュータを使ったことがありますか。(情報とコンピュータの授業以外)	ア よくある イ ある ウ あまりない エ ない
	5 技術室での約束事を書きなさい。	
	6 技術室での約束事を守っていますか。	ア 守っている イ 守っていない
	7 木材を使って何か作ったことがありますか。	ア よくある イ ある ウ あまりない エ ない
	8 金属を使って何かものづくりをしたことがありますか。	ア よくある イ ある ウ あまりない エ ない
	9 のこぎりを使ったことがありますか。	ア よくある イ ある ウ あまりない エ ない
	10 かなづちを使ったことがありますか。	ア よくある イ ある ウ あまりない エ ない
学習内容に関すること	11 木材のよさと欠点を書きなさい。	よさ 欠点
	12 金属のよさと欠点を書きなさい。	よさ 欠点
	13 プラスチックのよさと欠点を書きなさい。	よさ 欠点
	14 次の計算をしなさい。	
	(1) $2 \times \frac{2}{9} =$	
	(2) $\frac{2}{5} \times \frac{1}{2} =$	
	15 次の計算の答えを小数で書きなさい。	
	(1) $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} =$	
(2) $\frac{2}{5} \times \frac{1}{2} =$		
既習の「基礎となる事項の定着度」の状況	16 次の式で□の表す数を求めなさい。	
	(1) $3 : 1 = 12 : \square$	
	(2) $2 : 1 = 50 : \square$	

教科や教材に関する「興味・関心」の状況

これまで経験したことのある「学習の仕方」の状況

「学習への取組」の状況

「生活経験」の状況

既習の「基礎となる事項の定着度」の状況

※つまずきの原因や傾向まで分析

### (3) 学習指導における手立て

#### ① 教材や資料・教具の工夫

##### ア 基本的な考え方

「授業力」についての調査結果から、多くの教師が「教材や資料・教具の工夫は授業の目標を実現させる上で有効であり、個に応じた指導を展開するという観点からも重要な役割を果たす」ということを認識している。本研究では、主体的な問題解決や学び合いを行うなかで、「分かる喜び」や「できる喜び」を十分に味わわせるための教材や資料・教具の工夫として、次の3つの視点を設定した。

1つ目は、事象提示の工夫である。事象については「身近なもの」と「比較できるもの」に焦点を当てた。これは児童生徒にとって身近な事象を提示することにより、生活経験との関連から興味・関心を高めたり、また、比較できる事象を提示することにより、児童生徒の思考の流れをつくり、自分で考えようとする気持ちを高めたりするためである。

2つ目は、主体的な学習を促す工夫である。児童生徒は受け身の学習ではなく主体的な学習を通して、「分かる喜び」「できる喜び」を味わうことができる。そのため、児童生徒の主体的な活動を支える補助教材の開発を、教科の特性に応じて行うことにした。見通しが立たない児童や、つまづいている児童を個別に支援したり、また、新たな考えに気付かせたりするための教具の開発を行った。

3つ目は、思考を助け、広げるための工夫である。児童生徒での学び合いやそれぞれの考えを練り合う場面において、児童生徒の思考過程をたどることや、お互いの考えを共有したりすることが容易になる教具の開発を行った。

具体的に第1・第2の視点は、児童が問題を見つけ、その意図をつかむ導入段階の工夫や一人調べでの主体的な活動等に、また第3の視点は、グループ学習等でお互いに考えたことを共有したり、それぞれの考えを全体に広めたりする活動において生かしていく。

##### イ 実践例

上記の考え方に基づいて、平成19年度に小学校第4学年算数科「面積」の授業実践を行った。以下は、その学習指導過程の一部である。

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点（手立て）	資料・準備
導入	1 問題をつかみ、予想を立てて課題意識を持つ。 	☆ 問題文に児童の身近な生き物である「アリ」と「ダンゴムシ」の場面を設定することによって、児童に興味・関心を持たせたい。 ☆ 長方形と逆L字型の図形を比較させることによって、児童に既習事項とは少し違うという認識を持たせ、知的好奇心をくすぐりたい。	面積の公式や図 問題文 挿し絵 問題の図形
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <b>事象提示の工夫</b>            ・身近な素材の活用            ・異なるものの比較         </div>	☆ 2つの図形の実寸大の色画用紙を配布し、重ねたり、折り曲げたり、辺の長さを測ったりなど、児童たちに自由に操作させながら直接比較できないことに気付かせ、解決への意欲を高めたい。	2つの図形の実寸大の色画用紙

**主体的な学習を促す工夫**  
 ・具体物の配布（実寸大の色画用紙）



## ② 個に応じる工夫について

### ア 基本的な考え方

単元の指導計画段階で、児童生徒の実態把握や毎時間の形成的評価を踏まえた上で、児童生徒一人一人の興味・関心や学習状況などに応じた手立てをとることが重要である。本研究では、主体的な問題解決や学び合いの態度を身に付け、「分かる喜び」や「できる喜び」を十分に味わわせるための個に応じる工夫として、次の3点について取り組むことにした。

#### (ア) 見通しのもたせ方の工夫

結果の見通しについては、自力解決への意欲が高まるように、解決の糸口になるヒントにとどめる。また、主体的に問題解決に取り組むことができるように、解決のための方法や手段を一人一人が選べるようにする。多様な方法や手段を出し合うようにしたり、「どれでやりたいか」「どれならできそうか」という視点で選ばせたりすることは、それぞれが自分なりに解決できたという喜びにつながると考える。

#### (イ) 学習状況を把握する工夫

自分の学習状況を把握した児童生徒にとって、支援が与えられるまでの時間が短いほど学習効果が高くなるといわれている。そこで、問題解決の過程における一人一人の学習状況を、児童生徒自身に把握させるとともに、教師も把握して支援を行うようにする。ワークシートを用いるなどして、児童生徒自身だけでなく、教師にも学習状況が一目で分かるようにしておけば、その学習状況に応じて適切な支援を行うことが可能になり、児童生徒は「分かる喜び」や「できる喜び」を感じることができると考える。

#### (ウ) 学習状況の差に応じる工夫

教師は、把握した一人一人の学習状況に合わせて適切な支援を行う。自力解決において活動が停滞しやすい児童生徒にとって、問題解決への抵抗が大きすぎると、意欲は持続しない。また、解決できないままであれば「分かる喜び」や「できる喜び」を感じることはできない。活動が停滞している児童生徒には、助言や、ヒントカード・ヒントコーナーを活用するなどの支援が有効である。また、個人差に応じるという意味では、自力解決を早く終えた児童生徒に対する支援も必要である。早く解決できた場合は、発表での説明を考えさせたり、他の解決方法を考えさせたりする。またリトルティーチャーとしての活動も考えられる。リトルティーチャーは、教わる児童生徒にとって解決の手助けになるだけでなく、教える側の児童生徒自身の理解の深化や自信につながるなど、様々な効果が期待できる。

### イ 実践例

上記の考え方に基づいて、授業実践を行った。

中学校第2学年社会科「世界と日本の人口」において、「見通しのもたせ方の工夫」「学習状況の差に応じる工夫」の実践を行った。(平成19年度)以下に示すのはその指導案の一部である。

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	資料・準備
展開	<p>3 三股町の人口を増加させるために、町が取り組んでいることを考え、仮説(予想)を立てる。</p> <p style="text-align: center;">【個】→【全体】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ まずは個人で理由を考え、考えた仮説を発表する。</li> <li>○ 出された仮説を類型化し、自分の考えた仮説にあてはまるところにネームプレートを貼る。</li> <li>○ 仮説を調べるには何を調べよいかを考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ それぞれの生活体験や前時までの学習をもとに、人口増加の背景にあるものを考えさせ、個人の考えがまとまったら意見発表をさせる。</li> <li>○ 出された意見を分類して板書し、仮説を立てることのできない生徒に対しては出された意見を参考にするように助言する。</li> </ul>	ワークシート
	<div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p><b>見通しのもたせ方の工夫</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 結果の見通しは解決の糸口になるヒントにとどめる</li> <li>・ 解決方法や手段を一人一人が選べるようにする</li> </ul> </div>		



### ③ 板書（視覚的支援）の工夫について

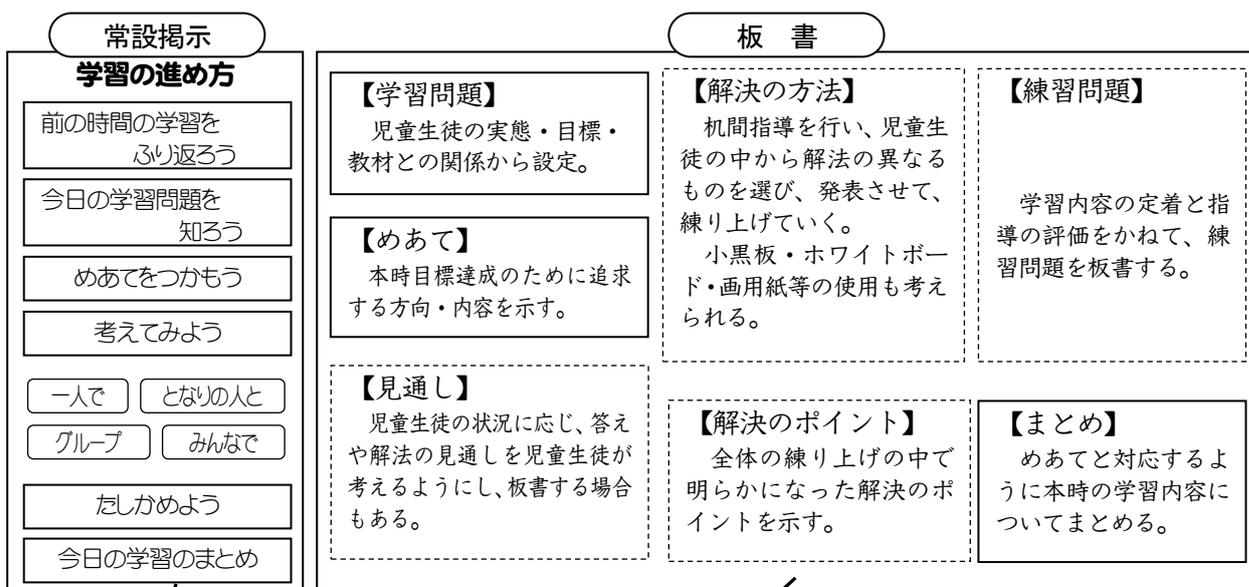
#### ア 基本的な考え方

板書（視覚的支援）は、児童生徒の思考の流れを大切にしながら、今学習していること、問題解決の過程、分かったことやできるようになったことなどを構造的に示す必要がある。また、児童生徒に、単元を通して意識させたいことについては常設掲示をすると効果的である。

主体的な問題解決や学び合いの過程で、児童生徒の考えや発想を板書に生かすことで、次のような効果が期待できる。1点目は、個々の考えを広めたり、深めたりするのに有効であり、児童生徒同士の考えをつなぎ、よりよい意見へと練り上げていくことができる。2点目は、学習内容や、課題解決のプロセス全体を振り返り、自分の思考の流れをフィードバックすることで、身に付けた知識・技能、見方や考え方を整理することが可能になる。

#### イ 実践例

上記の考え方に基づいて、小学校第6学年算数科「単位量あたりの大きさ」の授業実践を行った。まず、「学習の進め方」、「学習計画表」を常設掲示にし、児童が問題解決的な流れを意識できるようにするとともに、自分はどんな学習内容を身に付けているのかを確認できるようにした。次に、めあてを確認した後、見通しの時間をしっかり確保し、課題解決のゴールイメージをもって学習問題に取り組めるようにした。問題解決の過程では、児童の考えた式を小黒板に書いて、式の説明をするなど、児童の意見を全体に広め、練り上げていくようにした。このような過程の中で、各自の表現力、思考力、判断力が高まるとともに、理解が深まるようにした。



#### ウ 板書（視覚的支援）の工夫による効果

常設掲示の有効性については、88%の生徒が「学習の進め方」を活用したと回答している。この結果から、「学習の進め方」の掲示によって、問題解決の方法を確認できたことが分かる。また、児童の考えを小黒板に書くようにすることで、一斉学習で練り上げることが可能になった。児童の考えや発想を大切にすることは、児童に自信をもたせ、「分かった」「できた」と感じさせることにつながったと考えられる。

#### ④ 評価の工夫

##### ア 基本的な考え方

児童生徒が「確かな学力」を身に付け達成感や充実感を感じることができるようには、評価を単なる評価だけで終わらせるのではなく、評価をもとに、個に対応する指導に役立て児童生徒の学習の改善に生かしたり、指導計画に修正を加えたりすることも必要である。そこで、次の3つの視点を設定した。

1点目は、授業中に適切な指導・支援を行うための評価である。児童生徒の授業中の様子から思考力、判断力、表現力、問題を解決する力を把握し、個に応じた指導・支援や個を生かす指導・支援を行うことで一人一人に達成感や充実感を味わわせることにつながる。

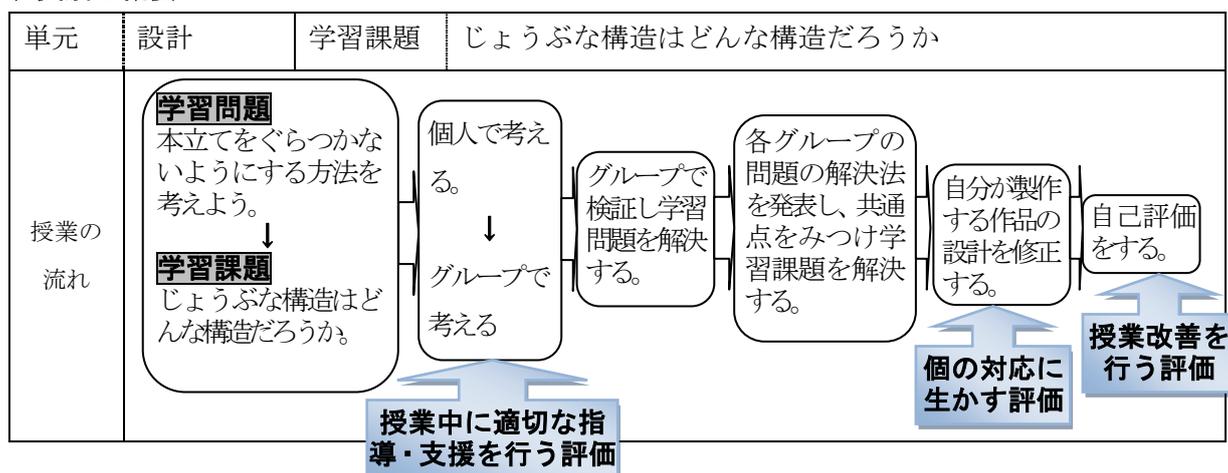
2点目は、個々の学習課題に対する到達度を把握し、授業後に個に応じた指導に生かすための評価である。到達度テスト等をもとに、基礎・基本の定着や知識や技能を活用する力を把握し、事後指導で個に応じた指導を適切に行うことは、児童生徒が「確かな学力」を身に付けたり、達成感や充実感を味わったりする上で大切なことである。

3点目は、授業改善を行う評価である。生徒による自己評価や授業後アンケートをもとに、授業を振り返るだけでなくやる気・意欲、達成感、充実感や授業構築の手立ての効果を把握し、補習的な授業を行ったり、次時の指導計画の改善に役立てたりすることができる。

##### イ 実践例

上記の考え方に基づいて中学校第1学年 技術・家庭科「設計」において、評価の工夫の実践を行った。(平成21年度)

##### (ア) 実践の概要



##### (イ) 授業中に適切な指導・支援を行う評価

生徒は、本立てがぐらつかなくなる方法を個人で考え、ワークシートに作図した。教師はワークシートの作図を確認しながら、観察・評価を行った。生徒の作図の状況から、思考力・判断力・表現力を把握し、個々の段階に応じた指導・支援を行った。またグループで考える際には、話合いの状況を観察し、問題を解決する力の把握を行った。ここでは、生徒のつぶやきを生かし、助言を行うことなどでグループでの思考の深化につなげるように心がけた。



【観察・評価をもとに、  
個に応じた指導を行う様子】



【つぶやきをグループでの  
思考の深化に生かす様子】

## (ウ) 授業改善を行う評価や個の対応に生かすための評価

評価を授業改善や個の対応に生かすために授業後に自己評価と到達度評価を行い、結果を分析し、改善点や対応を考えていった。

自己評価は、「意欲」、「達成感」、「充実感」、「手立ての効果」「自由記述（感想等）」の5つの観点で行った。「達成感」の項目では、個、グループ、全体のどの段階で課題の解決ができたかを把握することで、主体的な学び合いのための手立てが効果的であったかを把握した。また「充実感」については、満足度と満足できた理由・満足できなかった理由を記入させ、「できる喜び」や「分かる喜び」を生徒たちが味わうことができたかを把握した。また、「手立ての効果」では、指導計画作成シートをもとに講じた具体的な手立てが効果的であったかを把握した。この結果をもとに、授業の改善点を明らかにするとともに、補習的な学習が必要かを判断する材料にした。

到達度評価は、自分の作品のアイディアスケッチに修正を加えさせることで、授業で学んだことを生かすことができるかを評価した。前時までの既習事項である「機能」も関連させながら修正を加えている生徒は「A」、じょうぶな構造は理解し活用できているが既習事項との関連には気付いていない生徒は「B」、じょうぶな構造を理解できていない生徒は「C」と評価した。評価をもとに、個に応じて事後指導を行った。

自己評価、到達度評価を総括的に分析するために、授業後分析シートを作成し活用した。

**授業後分析シート**  
 ア 自己評価（アンケート）分析（4：たいへん 3：少し 2：あまり 1：まったく）

観点	自己評価(アンケート)項目	平均値
意欲	楽しく学習することができましたか。	3.87
	進んで学習することができましたか。	3.73
達成感	じょうぶな構造とはどんな構造なのかわかりましたか。	3.97
	どの活動のときにわかりましたか。(○をつけてください)	
	一人で調べるとき	2人
	友達と話すとき	7人
充実感	全体でまとめるとき	21人
	今日の学習に満足できたか	
	満足できた	30人
	理由 ・丈夫な構造がどんな構造だとわかったから ・説明がわかりやすく理解できた。 ・自分たちで考えたことを実際に釘を打って確認できた ・学習課題に沿ってきちんと勉強できた ・授業の内容がよく理解できたから ・班のみんなで話し合ったり、みんなで作業したりして楽しくできたから ・実際の身の回りの写真とかも見たから	
満足できなかった	0人	
手立ての効果	理由	
	しっかり考えることができたと思うか	3.83
	今日のような「問題を解決する学習」は好きですか。	3.43
	最初に復習した「設計の流れ」の要点は、役に立ちましたか。	3.50
	身近な本立てに関する問題は、おもしろそうだと思いますか。	3.73
	みんなで図を使って予想したことは、役に立ちましたか。	3.67
	一人で調べるときにヒントやアドバイスをもらいましたか。	
	もらってわかった	17人
もらってもあまりわからなかった	1人	
もらわなくてもわかった	12人	
わからないのにもらえなかった	0人	
実際に角材やクギを使うことで、じょうぶなことが実感できましたか。	3.90	
みんなで意見をまとめるとき、黒板はわかりやすかったですか。	3.93	
自由記述	とても授業を楽しんだのに、色々学べたのでよかった。	
	班で考えれば、自分一人ではわからないことも解決することができたのでうれしかった。	
	みんなで積極的に考えたので楽しかった。	
	僕はものづくりが好きなので、実際に作れてよかった。	
丈夫な構造が三角形の構造だと分かって驚いた。		
今日は色々な発見があって面白かった。色々なものを作ってみたいと思った。		
*毎日学習した三角形の構造は授業だけでなく、書架の造作でも役に立つと思ふ*		
分析と対応	生徒が課題を解決した段階では、個、グループ、全体と段階をおって人数が増えおり、学び合いの中で個々の理解を深めることができたのではないかと。	
	一人調べるときに、ヒントやアドバイスを与えても理解できなかった生徒が1名おり、もう一段階掘り下げたヒントも用意しておくべきだった。 ・設計のながれと要点を今後どのように活用していくのか説明が不足していたのではないかと。	

評価	対応
A 9名 30%	発展的課題として加工しやすさも考慮してアイディアスケッチに修正を加えさせる。
B 17名 57%	既習事項の機能（大きさ、使いやすさ、便利さ、デザイン、置く場所にあった工夫）も考慮するように指導し、アイディアスケッチに修正を加えるように指導する。
C 4名 13%	次時のアイディアスケッチの修正を行う際に集めて、個別指導を行う。

アンケートの結果を数値化し、実態を把握する。

数値が低い項目については、どのような手立てが必要だったのかを分析する。

授業改善のポイントをまとめる。

観点別評価をもとに、それぞれの段階の生徒に対する具体的な対応を考える。

## ウ 評価の工夫の効果

授業中に適切な指導・支援を行う評価の工夫において、一人調べの際に、生徒の作図の状況に合わせて指導・支援を行ったほとんどの生徒が「自分の考えをまとめることができた」と答えている。ワークシートに個人の考えを書かせたことでの的確に評価し個に応じた指導に生かすことができた。生徒のつぶやきを拾い上げることで、グループの考えが深まり、前時の既習事項も踏まえたよりよい答えを導き出したグループもあった。

授業改善を行う評価の工夫、個の対応に生かすことのできる評価においては、自己評価や到達度評価の結果を授業後分析シートを使って分析することで、総括的に授業を振り返ることができ、具体的な授業改善の方法や個に応じた事後指導の在り方を明らかにすることができた。







一人調べを行い、  
自分なりの考えをもつ  
〔個〕

調  
べ  
る

◇一人調べを行う視点◇

- 1 次の個別学習の特質に配慮して行う。
  - ① 既習学習を生かすことができる。
  - ② 自分で問題を解決する能力を、伸ばすことができる。
  - ③ 児童生徒の個性、能力、適性などに合わせるができる。
- 2 その後の話し合いで、意欲的に取り組むことができるように、自分の考えを持たせる。
- 3 教材分析を基にしてワークシートやヒントカード等を作成し、個に応じた指導を行う。
- 4 多様な方法を用いて調べさせる。  
(資料や教科書の活用、インターネット、本、ワークシート、実験、観察など)

留意点]

- ※ 活動が停滞している児童生徒には、活動内容を再確認させるような助言を行う。
- ※ 早く終えた児童生徒には、他の解決方法を考えさせたり、発表の準備をさせたりする。

④評価の工夫

②個に応じる工夫

お互いに考えた  
ことを意見交換し  
よりよいものに高める  
〔グループ〕

深  
め  
る

◇グループ学習を行う視点◇

- 1 次のグループ学習の特質に配慮して行う。
  - ① 話し合うことで、友達の考えのよさに触れたり、自分の考えを、友達の考えと比較したりすることができる。
  - ② 話し合う中で、自分の考えを修正、補充することができる。
  - ③ グループ学習では、全体の場でなかなか意見を出せない児童生徒も発言しやすい。
- 2 グループ学習を進める上で参考になるような進行表を作成したり、ルールを決めたりする。

留意点]

- ※ 話し合い活動の目的を明確にし、児童生徒に伝える。
- ※ 1人1人の意見を生かせるよう指導助言を行う。

①教材や資料・教具  
の工夫

④評価の工夫

②個に応じる工夫

お互いの考えを  
伝え合いよりよい  
ものに練り上げる  
〔全体〕

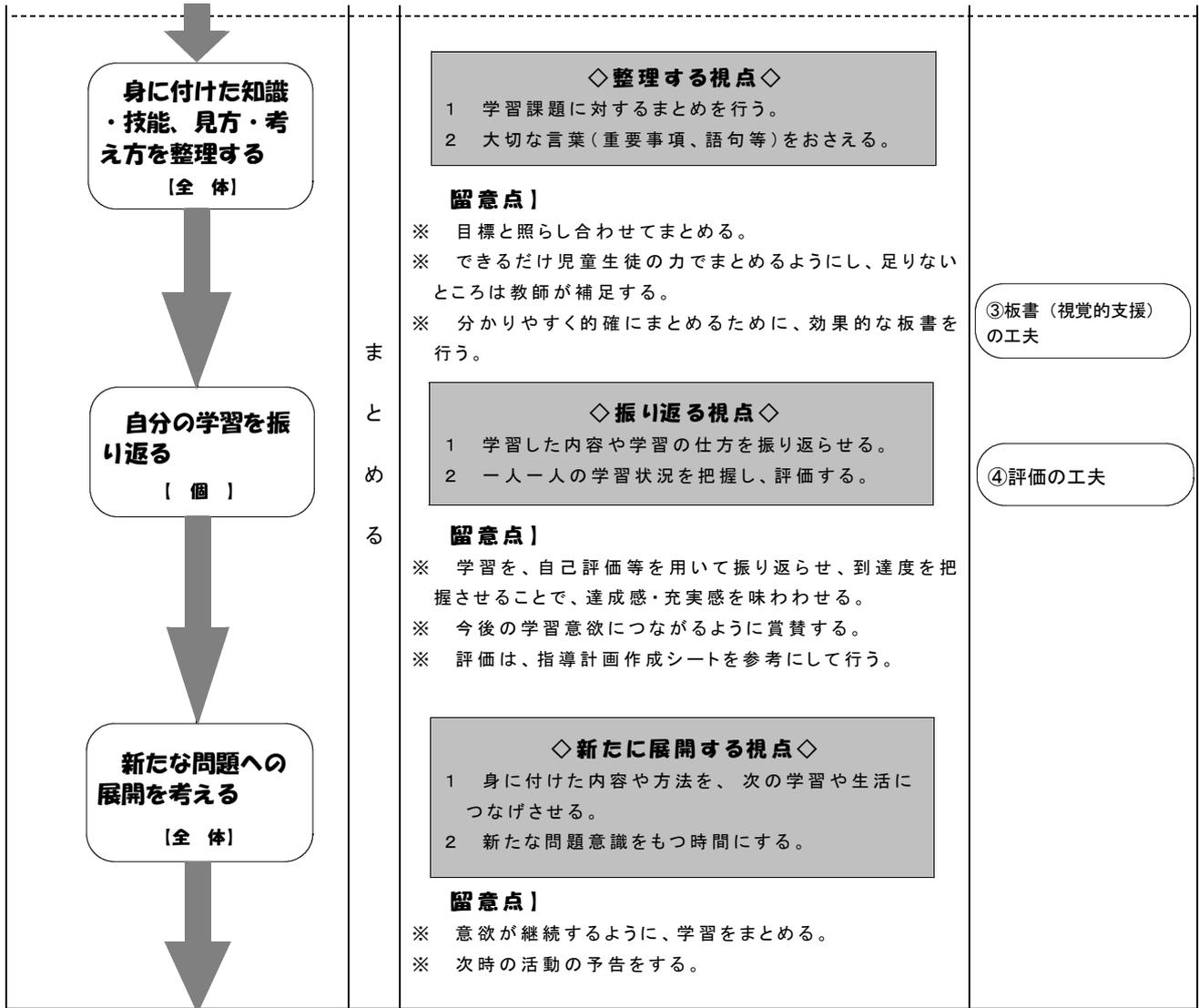
◇一斉学習を行う視点◇

- 次の一斉学習の特質に配慮して行う。
- ① 問題把握やまとめの共通理解が、効果的にできる。
  - ② 多様な情報により視野を広げ、多様な考えを出し合うことで、多角的に考えることができる。
  - ③ 全体の場で自分の考えを分かりやすく伝えたり、意見を比較したりすることで、思考力・判断力・表現力等を高めることができる。

留意点]

- ※ 共感や賞賛をしながら、1人1人が活躍できたと感じられるようにする。
- ※ 補足や切り返しの発問をしながら、児童生徒が自ら練り上げたと感じられるようにする。
- ※ 全体の場で練り上げを効果的に行うために、板書の工夫をする。
- ☆ 記録を参考にしながら、児童生徒の多様な考えを意図的に取り上げる。

③板書（視覚的支援）  
の工夫



**授業の後に**

主体的な問題解決や学び合いのためのチャート	段階	授業力	
		授業構築の視点	手立て
	実 態 把 握	<p style="text-align: center;"><b>◇授業評価の視点◇</b></p> <p>1 児童生徒の学習状況について評価する。</p> <p>① 到達度テスト等による評価 (基礎・基本の定着、知識や技能を活用する力)</p> <p>② 授業(単元)後アンケートによる評価 (やる気・意欲、達成感、充実感、指導計画作成シートにおける「対応」と「授業構築の手立て」の効果)</p> <p>③ 授業中の観察による評価 (思考力、判断力、表現力、問題を解決する力、達成感、充実感)</p> <p>2 児童生徒の評価を基に、授業改善のための工夫を考える。</p> <p><b>留意点]</b></p> <p>※ 学習目標に十分に到達できなかった児童生徒への手立てを講じる。 ※ 評価を基に、次の授業につなげ、授業を改善する。</p>	<p>④評価の工夫</p>

3 子どもたちが生き生きと輝く授業の実践  
 (1) 小学校における実践例 (小学校第4学年 算数科)

① 指導計画作成シート

学年	小4年	教科名	算数	単元名	はしたの大きさの表し方を考えよう(小数)	時数	8時間
単元の目標	○ 小数のよさに気付き、進んでこれを用いる。 ○ 小数のしくみや整数の計算をもとにして、小数の加法・減法の計算の仕方を考え、自分の考えを説明することができる。 ○ 小数を用いてはしたを表したり、数直線上に小数を表したりすることができる。また、小数の加法・減法の計算ができる。 ○ 小数の意味や表し方、大小関係、加法・減法の計算の仕方が理解できる。						
学習指導要領の指導内容	小数の意味とその表し方について理解するとともに、小数の加法及び減法の意味について理解し、それらを用いることができるようにする。 ア 端数部分の大きさを表すのに小数を用いること。また、小数の表し方及び10分の1の位について知ること。 イ 小数が整数と同じ仕組みで表されていることを知るとともに、数の相対的な大きさについての理解を深めること。 ウ 10分の1の位までの小数の加法及び減法の計算の仕方を考え、それらの計算ができること。						
単元の意義	十進法や加減の計算法を小数まで拡張できるようになり、1に満たない数を表すことができる。進んで生活や学習の中で、小数の表記や加減の計算を活用するようになる。						

	興味・関心		学習の仕方	学習への取組	生活経験	基礎となる事項の定着度		
	教科	教材						
児童期待する姿	算数の学習が好きである。	数の仕組みの学習や計算に進んで取り組む。	分からないことを進んで尋ねたり、分かったことを友だちに教えたりする。	自ら解決方法を考え、発表する。できるようにになったら、進んで練習問題に取り組む。	生活の中の小数に気付く。数や計算を進んで生活の中で活用する。	十進法が理解できている。	2位数の加法・減法の筆算ができる。	長さ・かさ・重さの単位換算ができる。

レディネスシート  
(対象1組27名)

児童生徒の実態	算数の学習を多くの児童が好きであるが、あまり好きでない児童が3名いる。	多くの児童が数の仕組みの学習や計算が好きである。数の仕組みや計算を好まない児童が5~6名いる。	友だちに教えたり、教えられたりすることを多くの児童が好きであるが、あまり好きでない児童も2名いる。	自分でやり方を考えて問題に答える多くの児童が好きであるが、積極的に発表する児童は偏っている。	小数は未習であるが、生活の中の小数に気付いている児童が9名いる。	何百何十は「100を□こ、10を□こ合わせた数」「10を□こ集めた数」という問いに、両方とも間違った児童が5名、1間違った児童が7名いる。	たし算や繰り下がりのないひき算の筆算は大体できている。繰り下がりが1回・2回のひき算の筆算を間違えた児童がそれぞれ7~8名(どちらも間違えた児童は3名)いる。	長さ・かさ・重さの3つとも単位換算ができた児童は9名だった。全て間違えた児童が2名いる。
---------	-------------------------------------	---	---	--	----------------------------------	---	---	--

分析

課題	苦手意識から、算数の学習自体や、数と計算の学習があまり好きでない。	できないことを気にして、友だちに教えられることを好きでない。	自力解決に自信がもてない。自分の考えに自信がもてない。	未習なので生活の中の小数に気付いていない。	十進法の仕組みが理解できていない。また、繰り下がりのあるひき算の筆算ができない。	長さ・かさ・重さの単位換算ができない。
対応	a 支援や協力学習等により、「できた」と実感させるとともに、学習への取組を賞賛する。	b つまずきの多い児童には、できるだけ教師が個別に支援を行うようにする。	c 解決の見通しをもたせるとともに、既習事項を活かすように助言する。 考えることが大切で、間違えても構わないことを伝える。	d 単元に入ってから生活の中の小数を見つけた活動を入れる。	e 単元導入時や授業の導入に必要な事項を押さえる。また宿題や朝自習などで練習させたり、必要に応じて授業外の時間に個別指導を行ったりする。	f 授業の導入時などにフラッシュ型教材等を使って復習させる。

小単元	時数	学習課題(本時の目標)	主な学習内容	評価計画			対応	
				関	考	表		
1 はしたの大きさの表し方	1	「.」のある数に関心をもつ。整数・小数の意味を理解し、はしたのかさを小数で表すことができる。	・はしたのかさの表し方による小数の動機付け ・小数による量の表し方、小数、整数の意味	○	○	○	a b e f	
	1	はしたの長さや重さを小数で表すことができる。身の回りで使われている小数を探し出すことができる。	・長さや重さなどの小数表示、複名数と小数	○	○		a b c d e f	
2 小数の大きさ	1	十進法をもとにした小数のしくみ分かる。	・小数のしくみと相対的見方、大小比較と数直線			○	a b c e	
	3 小数のたし算・ひき算	1	小数のたし算・ひき算の意味を理解し、簡単な小数のたし算・ひき算ができる。	・0.1のいくつ分の考えによる小数の加減の仕方		○	a b c e	
		1 (本時)	小数のたし算の計算のしかたを考え、筆算ができる。	・小数のたし算の筆算の仕方		○	○	a b c e
1	小数のひき算の筆算ができる。	・小数のひき算の筆算の仕方			○	a b c e		
4 復習	2	単元を振り返る。	・復習		○	○	○	a b c e

② 学習指導過程

：子どもたちが生き生きと輝く授業づくりのための手立て

本時の目標		小数のたし算の計算の仕方を考え、筆算ができる。		
段階	学習形態	主体的な問題解決や学び合い	指導上の留意点 (発問・指示・説明、評価)	資料準備
つかむ	全体	1 前時までの学習を振り返る。 ○ 小数のしくみ ○ 簡単な小数の加減	<ul style="list-style-type: none"> <li>フラッシュ型教材を使って復習することで、前時までの学習内容を振り返る。 【「基礎となる事項の定着度」への対応：e】</li> <li>「この前は、小数もたし算やひき算ができることを学習しました。」</li> <li>児童が身近な問題として捉えることができるように、親しみのある場所までの距離を小数で表す問題を扱う。 「今日の学習問題です。」 「尋ねられていることや分かっていることは何ですか。」</li> <li>前時の学習との違いを考えさせることで、本時の学習課題を設定する。 「この前の学習との違いはどんなことですか。」 「学習課題は何にしますか。」</li> </ul>	コンピュータ プロジェクタ フラッシュ型 教材
	全体	2 本時の学習問題を知る。  2つのコースの道のりは、5.4kmと3.2kmです。 2つのコースをまわると、何kmになりますか。  ①教材や資料・教具の工夫		学習問題
	全体	3 本時の学習課題を考える。  数が大きくなった時の小数の計算のしかたを考えよう。		学習課題
見通す	全体	4 答えや解決の方法を見通す。 (1) 式を立てる。 ・ $5.4 + 3.2$ (2) 解き方の予想をする。 ・ これまでの学習を生かして ・ 筆算で (3) 学習の進め方を知る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>見通しを十分もたせることで学習に対する意欲を高める。 【「学習への取組」への対応：c】</li> <li>「式はどうなりますか。」 「どうやって考えたらいいと思いますか。」</li> <li>「一人調べの後で隣の友達に説明をします。」</li> </ul>	
調べる	個人	5 一人調べをする。 ○ 計算のしかたを考える。 ・ 0.1がいくつか ・ $0.1$ で考えると $54 + 32$ ・ 位ごとに分けて $5 + 3$ と $0.4 + 0.2$ ・ 筆算で  ②個に応じる工夫 指導計画作成シート	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の観察をしながら、つまづいている児童には、これまでの学習を想起させ、自力解決できるようにする。 【「興味・関心」への対応：a、「学習の仕方」への対応：b】</li> <li>早く終えた児童には、別の考え方やうまく伝えるための説明を考えさせる。 「0.1がいくつかを考えてみましょう。」 「筆算のやり方の説明を考えましょう。」 「上手に教えてあげる説明を考えましょう。」</li> <li>◎ 既習事項を生かして、計算のしかたを考えることができる。〈観察・ノート〉</li> </ul>	
	ペア	6 隣の友達に発表する。 ○ 多様な意見を知る。		<ul style="list-style-type: none"> <li>ペアで発表させることで、友達の考え方に触れさせるとともに、全体での発表に自信をもたせる。</li> </ul>
深める	全体	7 全体で話し合う。  ③板書(視覚的支援)の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の考えを説明しやすいように、児童のノートを実物投影機で拡大提示しながら発表させる。発表した内容は教師が板書にまとめ、振り返ることができるようにする。</li> <li>それぞれの自力解決できたことを賞賛した上で、筆算で計算するのが効率良く計算できることを押さえる。 「どの考え方も答えが出たけど、どれがいいかな。」 「整数と同じように筆算で計算できるね。」 「教科書で筆算の仕方を確認しましょう。」</li> <li>間違えやすい問題を解いた後に、全員で答え合わせをすることにより、位の揃え方を確認させる。 「<math>7+5.5</math>と<math>1.2+2.8</math>の筆算の仕方確かめてみましょう。」</li> </ul>	実物投影機
	全体	8 解き方をまとめる。 (1) 小数も筆算で計算できる。  $\begin{array}{r} 5.4 \\ +3.2 \\ \hline 8.6 \\ \hline 8.6\text{km} \end{array}$ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">                     小数のたし算も、筆算で計算できる。                      ①位をそろえて書く。                      ②整数のたし算と同じように計算する。                      ③上の小数点にそろえて答えの小数点をうつ。                 </div> (2) 位の揃え方を確認する。 ・ $7 + 5.5$ $\begin{array}{r} 7 \\ +5.5 \\ \hline 12.5 \end{array}$ $\begin{array}{r} 7 \\ +2.8 \\ \hline 9.8 \end{array}$ ・ $1.2 + 2.8$ $\begin{array}{r} 1.2 \\ +2.8 \\ \hline 4.0 \end{array}$		
まとめる	個人	9 練習問題を解く。 ○ 練習問題 ○ ドリル  ②個に応じる工夫  指導計画作成シート	「今のやり方を使って、練習問題をしましょう。」 ・ 児童の観察をしながら、つまづいている児童に支援を行う。 【「学習の仕方」への対応：b】 ・ 早く終えた児童は、別の問題に取り組みせたり、つまづいている児童にアドバイスさせたりすることで、さらなる習熟を図る。 【「興味・関心」への対応：a】 ◎ 小数のたし算の筆算ができる。〈観察・ノート〉 ・ 児童が自分たちで答え合わせをできるように、解答を準備する。 ・ 児童の取組のよさを賞賛したり、次時の学習内容を考えさせたりして、学習に対する意欲の持続化を図る。 【「興味・関心」への対応：a】	練習問題 ドリル 解答
	全体	10 本時学習を振り返る。 ○ 学習内容 ○ 解決への取り組み方		「次は何についての学習だと思いますか。」
	全体	11 次時の学習内容を知る。 ○ 小数のひき算の筆算		

③ 授業後分析シート

ア 自己評価（アンケート）分析（4：たいへん 3：少し 2：あまり 1：まったく）

観点	自己評価(アンケート)項目	平均値
意欲	楽しく学習することができましたか。	3.85
	進んで学習することができましたか。	3.63
達成感	小数のたし算の筆算のやり方がわかりましたか。	3.78
	どの活動のときにわかりましたか。	
	1人で調べるとき	15人
	友達と話すとき	5人
	全体でまとめるとき	7人
充実感	今日の学習に満足できましたか。	
	満足できた	27人
	理由 <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えをしっかりと言えた。</li> <li>・発表をしたら正解だった。</li> <li>・みんなと楽しくできたから。</li> <li>・楽しくできたから。</li> <li>・小数の筆算が楽しかった。</li> <li>・小数の筆算ができるようになった。</li> <li>・一人で小数の筆算ができたから。</li> <li>・先生の説明が分かりやすく、全部できた。</li> <li>・先生がいろいろ教えてくれたから。</li> <li>・苦手な算数が得意になれた。</li> <li>・書くときや考えるときが楽しい。</li> </ul>	
	満足できなかった	0人
	理由	
	しっかり考えることができたと思いますか。	3.78
手立ての効果	今日のような「みんなで問題を考える学習」は好きですか。	3.52
	パソコンを使った復習は、役に立ちましたか。	3.85
	身近な場所を使った問題は、おもしろそうだと思いますか。	3.70
	みんなで式や答えを予想したことは、役に立ちましたか。	3.78
	一人で調べるときにヒントやアドバイスをもらいましたか。	
	もらってわかった	10人
	もらってもあまりわからなかった	0人
	もらわなくてもわかった	17人
わからないのにももらえなかった	0人	
	スクリーンでみんなの考えを見たのはわかりやすかったですか。	3.70
自由記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生とみんなと楽しく学習できた。</li> <li>・難しかったけど楽しかった。</li> <li>・地図がおもしろかった。</li> <li>・説明が分かりやすかった。</li> <li>・実物投影機でした学習はいつもより分かりやすかった。</li> <li>・小数の筆算ができるようになった。</li> <li>・やり方が分かったので次にできたときは簡単にできる。</li> <li>・苦手だから、がんばって覚えたい。</li> <li>・小数や新しい問題、難しい問題を教わりたい。</li> <li>・できるようになって、計算や筆算が好きになった。</li> <li>・ほかのところでも筆算を使いたい。</li> </ul>	
分析と対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意欲・達成感・充実感の平均値は高い。自由記述からも学習に対する満足度や筆算を活用しようとする意欲などは高いことが分かる。</li> <li>・1人で調べるときに、ヒントをもらわずにできた児童も多いが、発表の説明をよく考えていた。つまづいている児童について個別にヒントカードを渡したが、まとめて指導し、分かった時点で一人調べに入らせるなど、支援の仕方を工夫し、練習問題に取り組む時間を確保できると良かった。</li> <li>・身近に感じる問題やICT活用などの手立ての効果も出ている。発表した児童を賞賛したり、受容的な雰囲気づくりに努めたりして、発表に対する苦手意識を払拭したい。問題解決的な学習の経験を増やし、みんなで解決する良さを強調していきたい。</li> </ul>	

イ 到達度分析

評価	対応
A 22名 81%	小数のたし算の筆算を使った問題作りなど、発展的な問題にも取り組ませる。
B 4名 15%	計算ミスの内容に気を付けさせながら、ドリルやプリントで反復練習をさせることで、小数のたし算の筆算の仕方の定着を図る。
C 1名 4%	小数のたし算の筆算の仕方を理解し、実際に計算できるように個別指導を行う。

#### ④ 考察

##### ア 単元指導計画の工夫

学習指導要領における指導内容から、十進法や加減の計算法を小数まで拡張できるようになり、進んで生活や学習の中で小数の表記や加減の計算を活用できるようになることが本単元の意義と位置付けた。このことを踏まえ、小数のよさに気づき、進んで用いること、小数の意味や表し方を理解すること、小数の加法・減法の計算ができることなどを単元の目標として設定した。

単元の目標を具現化するために「期待する児童生徒の姿」を5つの観点で設定し、「レディネスシート」による調査を行った。調査により把握した実態を「期待する児童生徒の姿」に即して分析したところ、苦手意識から算数の学習自体や数と計算の学習があまり好きではない児童がいたり、自力解決に自信がもてない児童がいたりするなど、興味・関心や学習への取組には個人差があることが分かった。また、十進法の仕組みが理解できていない児童がいるなど、基礎となる事項の定着度における課題も明らかになった。

そこで、単元や各時間のどこで対応するかを検討し、指導計画（小単元、時数、学習課題、学習内容、評価計画）を作成した。単元の導入直後に生活の中の小数を見つける活動を取り入れるようにしたり、毎時間の授業において、導入時に基礎となる事項の復習を位置付けたり、解決の方法の見通しを十分にもたせたりするようにした。

「指導計画作成シート」と「レディネスシート」を活用することで、児童の実態に即して的確に対応できる単元指導計画を立てることができた。

##### イ 学習指導過程における手立て

###### (ア) 教材や資料・教具の工夫

問題場面のサイクリングコースの目的地を実際に学校の近くにある公園などに設定し、学校周辺の地図を掲示資料にして提示した。よく利用している公園の名前が出てきたことにより、児童は問題に興味を示していた。授業後、問題や地図がおもしろかったという感想もあり、身近なものを取り入れたことによって、学習に対する興味・関心を高めることができた。



【児童が身近に感じる問題と掲示資料】

###### (イ) 個に応じる工夫

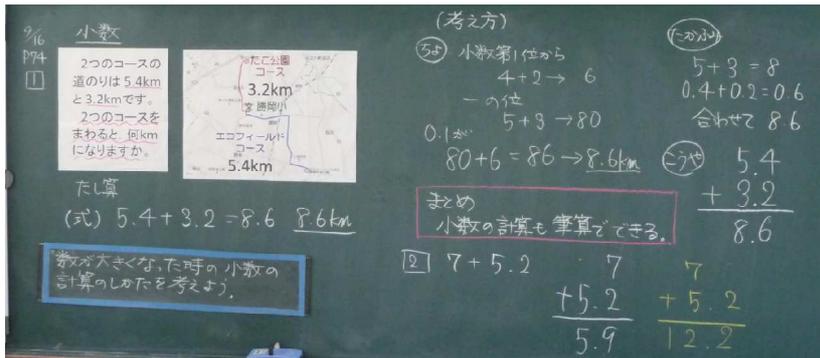
事前の調査から、既習事項が十分身に付いていない児童もいることが分かっていた。そこで自力解決が困難だと思われる児童を重点的に支援した。数種類のヒントカードを準備し、児童がどの考え方で解こうとしているか確認した上で、その児童の考え方に合った助言やヒントカードを与えるようにした。また、早く解決できた児童には、自分の考えをうまく伝えるための説明や別の解き方を考えるように指示した。



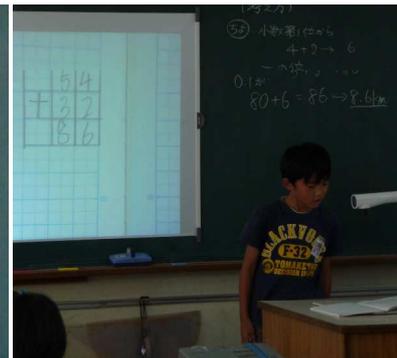
【個に応じる支援】

### (ウ) 板書（視覚的支援）の工夫

黒板は、左側に単元名・学習問題・式と答え・学習課題、右側に児童の考え方・まとめ・練習問題と、学習の流れに沿って整理した。児童は実物投影機で自分のノートを大きく映しながら説明した。アンケートから、友達の考えを実物投影機で見たことは分かりやすかったと感じていたことが分かる。それぞれの考え方が黒板に残るように、児童が発表している間にその考え方を教師が板書した。その後、板書した一人一人の考えを生かしながら、まとめへとつなげた。それぞれの考えを大切に、まとめに生かしたことは、発表した児童の自信につながったようである。また、板書は練り上げを効率的に行う上で役立った。



【板書】



【実物投影機による児童の説明】

### ウ 主体的な問題解決や学び合い

一人調べでは、既習事項を生かしながら、自分で選んだ方法で問題解決に取り組んでいた。一人調べの後に、ペアで発表し合い、友達の考え方を知ると同時に、自分の答えを確認できるようにした。さらに全体での練り上げで、3人の児童が自分の考えを発表し、それを生かして本時のまとめをした。ペアや全体で友達の発表を聞き、再考する中で、自分の考えに自信をもったり、筆算の仕方を理解したりする様子が見られた。

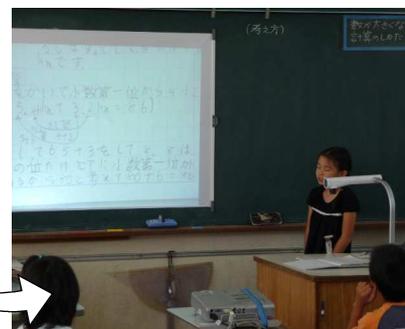
アンケートの結果からも、児童が主体的に学習に取り組み、全員が授業に満足していることが分かる。事後テストで、たし算の筆算の仕方が定着していない児童が1名だけいたが、一人調べや、ペア学習・全体での練り上げなどの学び合いを通して、全員がこの時間に達成感を感じていた。問題解決が好きかを尋ねた質問は、他に比べて評価が少し低いので、今後もそのよさを感じることでできるように成功体験を重ねる必要があるが、本時において、主体的な問題解決や学び合いを実現することができたと考える。



【一人調べ】



【ペア学習】



【全体での練り上げ】

(2) 中学校における実践例 (中学校第1学年 技術・家庭科)

① 指導計画作成シート

学年 中1年	教科名 技術・家庭科	単元名 設計	時数 13時間
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 身の回りの生活に生かされている技術を理解し、製作に生かそうとする。</li> <li>○ 使用目的や使用条件に即した機能と構造を理解し、作品を創意工夫する。</li> <li>○ 構想の表示方法と、製作図の描き方を理解し製作図を描く。</li> <li>○ 加工、接合、仕上げの方法を理解し、部品図を描く。</li> </ul>		
学習指導要領の指導内容	実践的・体験的な学習を通して、材料と加工に関する基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、技術と社会や環境とのかかわりについて理解を深め、技術を適切に評価し活用する能力と態度を育てる。		
単元の意義	知識と技術の習得とともに、知的財産を尊重する倫理観、緻密さへのこだわりや忍耐強さなどの育成につながる。		

	興味・関心		学習の仕方	学習への取り組み	生活経験	基礎となる事項の定着度		
	教科	教材						
児童期待する生徒の姿	生活と技術との関わりについて理解を深め進んで生活を工夫する。	ものづくりが好きである。	グループで話し合い活動をした経験があり、コンピュータを活用した経験もある。	技術室での約束を守り、互いに協力しながら安全に活動することができる。	のこぎりやかなづちを使って、簡単な木材加工をしたことがある。	材料の特徴が言える。	分数のかけ算ができる。	比の計算ができる。
レディネスシート (対象5組30名)								
児童生徒の実態	進んで生活を工夫し、創造しようとする生徒が少ない。	ものづくりの経験が少なく、ものをつくる喜びを知らない生徒が多い。	コンピュータは大部分の生徒が活用したが、話し合い学習の経験は少ない。	技術室での約束を守り、役割分担をし、協力しながら安全に活動することができている。	のこぎりやかなづちを使った経験のある生徒が極端に少ない。	材料の特徴が理解できていない生徒が8人いる。	分数の掛け算が理解できていない生徒が5人いる。	比が理解できず、計算できない生徒が16人いる。

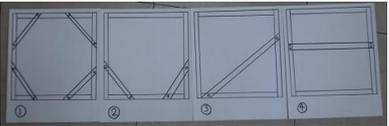
分析

課題	創意工夫するもとなる知識を与える。	話し合い活動が円滑に進める工夫を行う。	常に安全に留意させる。	工具を正しく使えるように配慮する。	材料の特徴と理解が理解させる。	一部の分数の計算ができない生徒に分数の計算の仕方をアドバイスする。	縮小について理解させ、計算ができるようにする。
対応	a 身近な生活に関連した題材を用いる。身近な生活に生かされている技術に触れる。	b 話し合い活動の進め方を示す。	c 常設掲示と毎時間必ず、約束事を確認させる。	d 図に示し、わかりやすく説明をする。常設の掲示を行う。	e 活用する時間の前半に復習する時間を設ける。ワークシートを工夫する。	f ヒントカード、机間指導(個別指導)を行う。	g 演習を行う時間、や小テストを行う時間を設ける。(一斉指導)

小題材	時数	学習課題(本時の目標)	主な学習内容	評価計画				対応
				関	創	技	知	
設計のすすめ方	0.5	設計の進め方を理解する。	・ 作業計画を立てる。	○			○	
製作品の決定	1.5	使用目的や使用条件を考えて、つくりたいものを考える。	・ 生活を便利にするもののアイディアスケッチをする。		○			
機能	1	使用目的や使用条件に即した形状や寸法、使いやすさを工夫する。	・ 機能を考え、構想を修正する。		○		○	
じょうぶな構造	1(本時)	使用時に加わる荷重を考え、じょうぶな構造を考える。	・ じょうぶな構造を考えて構想を修正する		○		○	a b c d
材料の選定	1	使用目的、使用条件にあった材料を選ぶ。	・ 材料の特徴を考え、材料を選ぶ。				○	e
構想図	1	立体をキャビネット図で表す。	・ 立体を図に表す。①			○	○	a
	1	立体を等角図で表す。	・ 立体を図に表す。②			○	○	
	0.5	縮小の仕方、計算を理解する。	・ 立体を縮小して表す。				○	f g
	3.5	つくりたいものの構想図を描く。	・ つくりたいものを構想図で表す。	○	○	○	○	f g
部品図	2	第三角法で部品図を描く。	・ 部品図を描く。				○	

② 学習指導過程

：子どもたちが生き生きと輝く授業づくりのための手立て

本時の目標		じょうぶな構造を理解し、創意工夫し構想を修正する。		
段階	学習形態	主体的な問題解決や学び合い	指導上の留意点 (発問・指示・説明、評価)	資料準備
つかかむ	全体	1 前時の学習内容を確認する。 ○ 機能とは何か ③板書(視覚的支援)の工夫 2 本時の学習問題を知る。 見本の本立てがぐらつかないようにするにはどうすればよいか。 ○ 下図のように補強して、ぐらつかなくなるかを予想する。 ①教材や資料・教具の工夫  3 本時の学習課題を考える。 ②「じょうぶな構造はどんな構造だろうか。」	<ul style="list-style-type: none"> <li>ワークシートと学習カードを使い振り返る。</li> <li>前時までの既習事項を生かしながら設計を進めさせるために、黒板の上段を使い、設計の流れと留意点を確認する。</li> <li>学習問題を明確にするために、アイデアスケッチと背板のない見本の本立てを示す。</li> <li>終末で機能にも触れるために、置く場所(教卓の上)、使用目的(本の整理)であることも伝えておく。</li> <li>実際に角材と釘2本での補強を演示する。 「これでぐらつかなくなったと思いますか?」</li> <li>見本を使って、補強できていないことを知らせる。</li> <li>釘を打った場所も丸で明確に示しておく。</li> <li>学習カードを掲示し、本日の課題を明確にする。 「じょうぶな構造とはどんな構造だと思いますか。」</li> </ul>	ワークシート 見本 かなづち、釘2本、角材本 学習カード
	個 見通す グループ	4 製品をじょうぶにする方法を考える ○ 角材を使って、本立ての背板がない状態のものを、どのように補強すればじょうぶになるか考える。 ②個に応じる工夫 5 班で発表をする。 ○ 班の中で最もよいと思われる方法を選ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>「補強に使える工具と材料(角材28cm1本、14cm4本、釘は最大8本)です。」</li> <li>「いく通りかの方法が考えられます。早く考え付いた人は、他の方法も考えてください。」</li> <li>自分の考えを具体的にするために、ワークシートに考えを記入させ、個人の考えに自信を持たせる。</li> <li>班長を中心に全員の考えを発表できるように進行カードを配付する。 【「学習の仕方」への対応:b】</li> <li>個人の考え生かすために、友達の見解を否定しないように配慮させ、アドバイスし合うようにする。</li> </ul>	材料工具 ワークシート 進行カード
調べる	グループ	6 実際にじょうぶな構造になるように製作し検証する。 (1) 角材、釘(最大8本)、かなづちを使って本立てがぐらつかないようにする。 (2) ぐらつかないことが確認できたら、記録用紙に記入をし、黒板にはる。 (3) 早く検証できた班は理由を考える。 7 各班の結果を発表する。  (予想)	<ul style="list-style-type: none"> <li>かなづちの使い方を簡単に説明する。</li> <li>最小限の説明に留める。 【「生活経験」への対応:d】</li> <li>安全に作業を進めるために、約束事を確認する。 【「学習への取り組み」への対応:c】</li> <li>用紙とペンを配り、補強を入れた部分を図で示し、掲示させる。</li> <li>導入の補強と④の違いを知らせるために、釘は○で示すように指示をする。</li> <li>効率よく作業を進めるために役割分担をするように指示をする。</li> <li>掲示した形でどの程度じょうぶにできたかを班長にたずねる。</li> <li>考えを深めるために、理由を考えた班に発表を促す。</li> </ul>	学習カード 釘本 かなづち 画用紙 ペン
	全体	8 各班の結果の共通点を考え発表する ①教材や資料や教具の工夫 ②「じょうぶな構造は三角形の構造である。」	<ul style="list-style-type: none"> <li>「各班の結果の共通点はなんですか。」</li> <li>三角形の構造に気付きやすくするために、例①②③のような結果について考えさせ、例④の結果については、後で考えることを伝える。</li> <li>生徒が気付きにくい場合は、3つの支点を朱で示し、ヒントを与える。 「じょうぶな構造は三角形の構造です。」</li> <li>④を示し、釘が3本以上必要なことに触れる。このとき、あまり深く生徒に考えさせないために、拡大図と磁石を用意し、ヒントを与える。</li> </ul>	ワークシート 学習カード 拡大図
まとめる	全体	9 本時の学習の要点を整理する。 ③板書(視覚的支援)の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>校舎の耐震補強工事の写真を見せ、三角形の構造により補強が施されていることを紹介する。 【「興味・関心」への対応:a】</li> <li>機能について触れ、今回の条件では、④がもっとも機能的であることを説明する。</li> <li>ワークシートの演習問題を解くように指示し、評価する。</li> </ul>	プロジェクタ
	個	10 演習をする。 ④「三角形の構造と機能を意識しながら、じょうぶな構造にすることができる。(ワークシート)」 ⑤指導計画作成シート	<ul style="list-style-type: none"> <li>④三角形の構造と機能を意識しながら、じょうぶな構造にすることができる。(ワークシート)</li> <li>黒板上段を使い、説明をする。 「次の時間はアイデアスケッチの修正を行います。」</li> </ul>	ワークシート 学習カード
全体	11 次時の学習内容を聞く。			学習カード

③ 授業後分析シート

ア 自己評価（アンケート）分析（4：たいへん 3：少し 2：あまり 1：まったく）

観点	自己評価（アンケート）項目	平均値
意欲	楽しく学習することができましたか。	3.87
	進んで学習することができましたか。	3.73
達成感	じょうぶな構造とはどんな構造なのかわかりましたか。	3.97
	どの活動のときにわかりましたか。（○をつけてください。）	
	・ 1人で調べるとき	2人
	・ 友達と話すとき	7人
充実感	今日の学習に満足できたか	
	・ 満足できた	30人
	理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 丈夫な構造がどんな構造だとわかったから。</li> <li>・ 説明がわかりやすく理解できた。</li> <li>・ 自分たちで考えたことを実際に釘を打って確認できた。</li> <li>・ 学習課題に沿ってきちんと勉強できた。</li> <li>・ 授業の内容が良く理解できたから。</li> <li>・ 班のみんなで話し合ったり、みんなで作業したりして楽しくできたから。</li> <li>・ 実際の身の回りの写真とかも見れたから。</li> </ul>
	・ 満足できなかった	0人
	理由	
		しっかり考えることができたと思うか
手立ての効果	今日のような「問題を解決する学習」は好きですか。	3.43
	最初に復習した「設計の流れ」の要点は、役に立ちましたか。	3.50
	身近な本立てに関する問題は、おもしろそうだと思いますか。	3.73
	みんなで図を使って予想したことは、役に立ちましたか。	3.67
	一人で調べるときにヒントやアドバイスをもらいましたか。	
	・ もらってわかった	17人
	・ もらってもあまりわからなかった	1人
	・ もらわなくてもわかった	12人
	・ わからないのにももらえなかった	0人
	実際に角材やクギを使うことで、じょうぶなことが実感できましたか。	3.90
	みんなで意見をまとめるとき、黒板はわかりやすかったですか。	3.93
自由記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ とても授業を楽しんだのに、色々学べたのでよかった。</li> <li>・ 班で考えれば、自分一人でわからないことも解決することができたのでうれしかった。</li> <li>・ みんなで積極的に考えたので楽しかった。</li> <li>・ 僕はものづくりが好きなので、実際に作れてよかった。</li> <li>・ 丈夫な構造が三角形の構造だと分かって驚いた。</li> <li>・ 今日色々な発見があって面白かった。色々なものを作りたいと思った。</li> <li>・ 今日学習した三角形の構造は技術の授業だけでなく、普段の生活でも役に立つと思う。</li> </ul>	
分析と対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒が課題を解決した段階では、個、グループ、全体と段階をおって人数が増えており、学び合いの中で個々の理解を深めることができたのではないかと。</li> <li>・ 一人調べのときに、ヒントやアドバイスを与えても理解できなかった生徒が1名おり、もう一段階掘り下げたヒントも用意しておくべきだった。</li> <li>・ 設計のながれと要点を今後どのように活用していくのか説明が不足していたのではないかと。</li> </ul>	

イ 到達度分析

評価	対応
A 9名 30%	発展的課題として加工しやすさも考慮して、アイデアスケッチに修正を加えるように助言する。
B 17名 57%	既習事項の機能（大きさ、使いやすさ、便利さ、デザイン、置く場所にあった工夫）も考慮するように指導し、アイデアスケッチに修正を加えるように助言する。
C 4名 13%	次時のアイデアスケッチの修正を行う際に集めて、個別指導を行う。

#### ④ 考察

##### ア 単元指導計画の工夫

学習指導要領における指導内容から「知識と技術の習得とともに、知的財産を尊重する倫理観、緻密さへのこだわりや忍耐強さなどの育成」が本単元の意義と位置付けた。このことを踏まえ、身の回りに生かされている技術に目を向けさせ、それぞれの使用目的や使用条件に生かし、より緻密な設計をさせることをめざして単元の目標を設定した。

単元の目標を具現化するために「期待する児童生徒の姿」を5つの観点で設定し、「レディネスシート」による調査を行った。分析の結果、生活を創意工夫する意識が低いことや、話し合い活動等の経験があまりなく、様々な角度から意見を出し合いながら、課題を解決した経験が少ないことが分かった。また、小学校算数科で既習である分数の計算や縮小の計算などの設計に必要な基礎となる事項が定着していない生徒が多いことも分かった。

そこで、単元のどこで対応が必要かを考え、指導計画(小単元、時数、学習課題、学習内容、評価計画)を作成した。構想図の描き方を指導する際に、縮小の仕方について演習する時間を設けることで、基礎となる事項の定着不足を補うことなどができた。

「指導計画作成シート」と「レディネスシート」を活用することで、単元の意義を踏まえるとともに他教科での既習事項の定着度との関連も考えながら、生徒の実態に即した指導計画を立てることができた。

##### イ 学習指導における工夫

###### (ア) 板書の工夫

技術室の黒板は、上下スライド式の2段構造になっている。そのことを生かし、板書の工夫を行った。

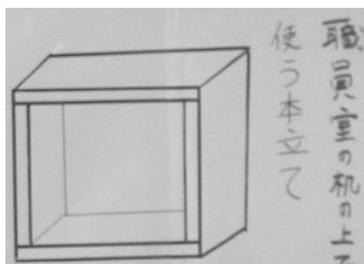
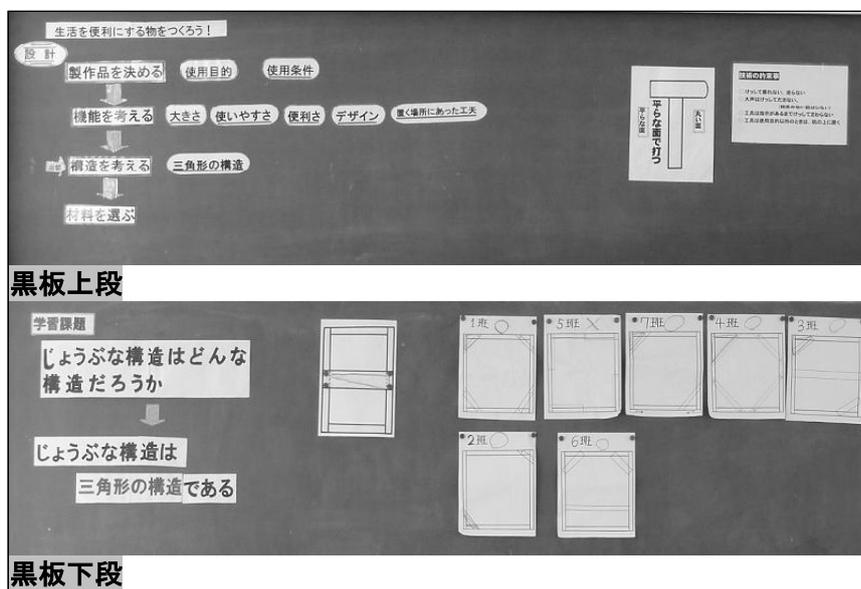
黒板の上段は、単元(設計)の流れと前時までの学習の要点を常設掲示している。まとめの際に本時の要点と次時の学習内容を付加した。

黒板の下段に黒板左側に本時の学習課題と答えを上下に示すことにより、1単位時間の要点が分かるようにした。

授業後アンケートを分析すると「みんなで黒板をまとめるときは分かりやすかった」とほとんどの生徒が答えていた。設計の流れについては「あまり役に立たなかった」という生徒が数名いた。下段黒板は効果的な板書ができたが、上段黒板については「流れ」と「要点」がはっきり区別できるようにするなどの工夫が必要であった。

###### (イ) 教材や資料・教具の工夫

「机の上の本を整理するための本立ての製作」という身近な素材を題材とした。次に実際に不安定な模型を示しながら、「この本立てをじょうぶにするにはどうすればよいか」という問題を設定させ、「じょうぶな構造はどんな構造か」という学習課題を提示した。生徒たちは、自分たちが取り組んでいる製作との共通点も多いためか、意欲的に課題を解決して、自分たちの製作に生かそうとする態度がみられた。授業後アンケートでも「身近な本立てに関する問題は、おもしろそうだと思いますか。」という質問に対して、ほとんどの生徒がおもしろかったと答えている。主体的な学習を促すことのできる教材であったと考える。



【アイデアスケッチを提示】



【模型を示しながら課題を提示】

### (ウ) 個に応じる工夫

一人調べで導き出した個人の考えをワークシートに記入(作図)させた。観察・評価を行い、まったく作図ができていない生徒には、模型を用いて視覚的にとらえさせるための助言を行った。また、早く考えのまとまった生徒には、他の方法も考えてみるように指示をし、多様な考えを引き出し、グループ学習の際に考えを深めることに生かされるようにした。授業後のアンケートにおいて「一人調べの時にヒントやアドバイスをもらいましたか。」という項目に対し、「もらって分かった」生徒が17名、「もらわずに分かった」生徒が12名だった。一方「もらってもあまり分からなかった」と答えた生徒も1名いた。個に応じた指導は、概ね効果があったと考えるが、「もらっても分からなかった」という生徒には、さらに丁寧な指導・支援が必要であった。



【具体物を用いた指導・支援】

### ウ 主体的な問題解決や学び合い

主体的な学び合いを行うために、まず個人の考えをまとめる時間を設定した。ワークシートに記入することで、自分の考えをしっかりとイメージすることができた。次に友達とペアで意見交換を行い、自分の考えを整理することで、班の中で自分の意見を自信をもって発表することができた。実際に本立てを補強して検証し「本立てをじょうぶにするにはどうすればよいか」という問題を解決した。検証の場面では、実習を取り入れたことで、使いやすさやデザインなどの既習事項も生かしながら工夫する班もあった。それぞれの班の解決策を発表し、共通点を探ることで「じょうぶな構造は三角形の構造である」という学習課題に対するまとめを生徒たちが自ら導き出した。全体でまとめるときに達成感を感じた生徒が多く、主体的な学び合いによって、自分の考えが深まり、答えを導き出した生徒が多かったようだ。また、到達度も87%の生徒が指導目標に到達しており、「授業づくりマニュアル」を用いて授業を構築することで、達成感、充実感を味わう生徒が多く見られた。



【自分の考えをまとめる】



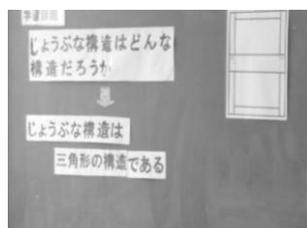
【友達にアドバイスをもらう】



【班で話し合う】



【班で検証し問題を解決する】



【全体で学習課題を解決する】

(3) 高等学校における実践例 (高等学校第1学年 国語科)

① 指導計画作成シート

学年 高1年	教科名 国語総合	単元名 鶏口牛後	時数 3時間
単元の目標	○ 漢文の内容を正確に理解する力を養うことができる。 ○ 史伝のおもしろさを味わい、歴史に対する理解を深めることができる。 ○ 古代の中国の人々の生き方について考えることができる。		
学習指導要領の指導内容	ア 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。 イ 文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。		
単元の意義	戦国時代における諸侯の生き方を考えることによって、漢文への興味・関心を広げる。		

	興味・関心		学習の仕方	学習への取組	生活経験	基礎となる事項の定着度			
	教科	教材				漢文の訓点に注意して書き下し文にすることができる。	中国の古典から生まれた故事成語についていくつか理解している。	句法に注意しながら、本文を口語訳することができる。	漢文に出てくる人物に興味がある。
期待する児童生徒の姿	国語が好きである。	漢文を読むのが好きである。	グループで多様な意見を交流させ、よりよい答えを導きたいと考えている。	文章を理解するまで読むとする。分らないことは進んで辞書で調べたり、教科書を読みなおしたりする。	中国の歴史をテーマとしたマンガや映画に親しんでいる。	漢文の訓点に注意して書き下し文にすることができる。	中国の古典から生まれた故事成語についていくつか理解している。	句法に注意しながら、本文を口語訳することができる。	漢文に出てくる人物に興味がある。

レディネスシート  
(対象8組41名)

児童生徒の実態	半数以上が国語が好きではない。(22名)	漢文は苦手としている。(24名)	自分の考えを述べるのが苦手な生徒がいる。(3名)	文章は難しいと読むのをあきらめる傾向が強い。分らないことはそのままにしておく傾向が強い。	「三国志」には興味を持つ生徒もいる。(17名)	助動詞、助詞をひらがなで書くことを理解していない生徒が数名いる。	「矛盾」、「虎の威を借る狐」については理解している。	句法の参考書を見ながらであれば、口語訳ができる。(23名)	漢文に出てくる人物に興味がない。(17名)
---------	----------------------	------------------	--------------------------	--	-------------------------	----------------------------------	----------------------------	-------------------------------	-----------------------

分析

課題	漢文が苦手な生徒が半数以上いる。	自分の意見に自信がない。	目的をもって読んでいない。他人の意見を待っている。	漢文の文章に抵抗感がある。	品詞を理解していない。	故事成語の背景となる出来事を理解していない。	漢文の基本文型を理解していない。	人物の生き方に関心が持てない。
対応	a 的確な漢文の解釈を求めめるのではなく、人物の生き方について考えさせることで、漢文に興味を持つようにする。	b 少人数のグループの中で、他の意見を否定しないような活動にする。	c 生徒が疑問に思う部分を課題として提示し考えさせる。	d 漢文を口語訳で与えることで、読みやすくする。	e 古文文法の学習と関連させながら品詞の理解を促す。	f 「鶏口牛後」は国を説得する言葉として用いられていたことを理解させる。	g 音読を繰り返し行い、漢文の文型に慣れる。	h 現在の考え方と共通する部分等を想起させる。

時数	学習課題(本時の目標)	主な学習内容	評価計画					対応
			関	話	書	読	言	
1	戦国時代について知る。訓点に気を付けて書き下し文にできる。	・戦国七雄が活躍した時代背景への理解 ・受身や使役の送り仮名。置字や返読文字の理解	○		○	○	○	a c e
1	句法に気を付けて口語訳ができる。	・比較、選択の句法の理解 ・全体の内容の読み取り	○		○	○	○	e f g
1(本時)	『史記』の読み取りから戦国時代における諸侯の生き方を考える。	・本文と本文以外の教材を根拠にした、人物の生き方の読み取り	○	○		○	○	a b d h

② 学習指導課程 ( ) :生徒が生き生きと輝く授業づくりのための手立て

本時の目標		『史記』の読み取りから戦国時代における諸侯の生き方を考える。		
段階	学習形態	主体的な問題解決や学び合い	指導上の留意点 (発問・指示・説明・評価)	資料準備
つかむ	全体	1 音読をし、前時の確認をする。 ○ 六国が同盟を結んだ根拠を考える。 「六国が協力すれば秦の10倍の兵力になる。」 「牛後にはなりたくない。」 「協力すれば秦に勝てる」	・ 句法(抑揚、比較)に留意して音読させる。 「なぜ六国は同盟を結んだのでしょうか」 ・ ノートの口語訳を確認させる。 ・ 黒板の地図も示しながら、秦の強大さを確認させる。	地図
見通す	全体	2 本時の学習問題を知る。 王が鶏口を選んだ理由は何か? 3 本時の学習課題を考える。 昔のリーダーの思いを考えよう ①教材や資料・教具の工夫	「自分自身は鶏口と牛後どちらの生き方ですか」 ・ 鶏口牛後どちらの生き方がよいか生徒に考えさせることで本時の学習問題についての関心を高める。 【「興味・関心」への対応：a】	学習問題 学習課題 意味確認プリント
調べる	個人	4 一人調べをする。 ○ 蘇秦の遊説の内容を読み、なぜ王が鶏口を選んだかをまとめる。 ②個に応じる工夫 指導計画作成シート	「なぜ王は鶏口を選んだのでしょうか」 ・ 鶏口を選んだ六国の王の考えを想像するために、蘇秦が韓を遊説した時の文章を読ませる。 【「生活経験」への対応：d】 ・ 王が蘇秦の考えに納得した部分に線を引かせる。 ・ 分からない生徒には、国、王、秦との関係についてどう書いてあるかの視点を与える。 ◎ 資料の文章をもとに自分の考えを書くことができる。 <観察・ワークシート>	ワークシート
	ペア	5 ペアで意見を発表し合う。 「自国への自信」 「一国の長として生きていきたい」 「祖先の恥になることはしたくない」 「大きな国にはついていきたくない」	・ 鶏口を選んだ理由をまとめて、隣の人と確認させる。意見が言えないときは、どの部分に線を引いたかを確認させる。 ・ 机間指導しながら、生徒が書いた意見を確認しておき、発表の際に取り上げる。 ・ ペアの意見を発表させる。関連する内容については続けて発表させる。 ・ 同じような意見しか出ない場合は、異なった視点を与え、生徒に考えさせる。	
	グループ	6 グループで話し合い、意見を発表する。 ③板書の工夫	・ 王の思いについて、班長を中心に、全員の意見を聞き合う。 ・ 板書や個人の意見を参考に、グループの意見としてまとめる。全員が納得した内容を書くように指導する。 【「学習の仕方」への対応：b】 ・ 班長に発表させる。	
深める	全体	7 諸侯の思いについてまとめる。 指導計画作成シート すばらしい国力がありながら、秦につかえるのは祖先の恥であるから、六国同盟を結んで秦に立ち向かおうという思い。	・ 六国同盟を結んだときの王の思いをワークシートにまとめさせる。 ◎ 諸侯の生き方を考えることができる <観察・ワークシート> ・ 鶏口を選ぶ背景に、王のプライドや祖国愛があったことを確認する。 ・ 秦に土地を奪われる危険性も鶏口を選ぶきっかけになったこと、服従ではなく、同等の立場である六国同盟は魅力的であったことを押さえる。	ワークシート
まとめる	全体	8 本時の学習を振り返る。 ○ 鶏口牛後という言葉について再度考える。 9 本文を音読する。	・ 生徒に、鶏口牛後という言葉について、自分の生き方と照らし合わせて考えさせる。 【「基礎となる事項の定着度」への対応：h】 ・ 全体を振り返りながら音読させる。	ワークシート

### ③ 授業後分析シート

ア 自己評価(アンケート)分析(4:よくできた 3:少し 2:あまり 1:まったく)

観点	自己評価(アンケート)項目	平均値
意欲	楽しく学習することができましたか。	3.66
	進んで学習することができましたか。	3.32
達成感	昔のリーダーの「思い」がわかりましたか。	3.42
	「なぜ『鶏口』を選んだのか」は、どの活動のときにわかりましたか。	
	1人で調べるとき	13人
	友達と話すとき	13人
	全体でまとめるとき	12人
充実感	今日の学習に満足できたか	
	満足できた	38人
	理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 鶏口を選んだ理由を知ることができたから。</li> <li>・ 昔の人の考えを知ることができたから。</li> <li>・ いろいろな人の意見を聞くことができ、納得するところが多かったから。</li> <li>・ みんなで話し合っ意見をもとめることができたから。意見交換ができたから。</li> <li>・ 新たな切り口で物語を見ることができたから。</li> <li>・ 集中できたから。活気があったから。分かりやすかったから。面白かったから。</li> <li>・ 友達と話すことによって考えが深まったから。</li> </ul>
	満足できなかった	0人
	しっかり考えることができたと思うか	3.53
手立ての効果	今日のような「問題を解決する学習」は好きですか。	3.37
	地図等を使った復習は、役に立ちましたか。	3.24
	「王たちが『鶏口』を選んだ理由は何か」という問題は、おもしろそうだと思いますか。	3.26
	みんなで教科書を使って予想を立てたことは、役に立ちましたか。	3.39
	一人で調べるときにヒントやアドバイスをもらいましたか。	
	もらってわかった	7人
	もらってもあまりわからなかった	2人
	もらわなくてもわかった	29人
	わからないのにもらえなかった	0人
	ワークシートは使いやすかったですか。	2.79
	みんなで意見をまとめるとき、黒板はわかりやすかったですか。	3.50
自由記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 面白く授業を受けることができ良かったと思います。</li> <li>・ 久しぶりの班活動でとても楽しかった。またやりたい。</li> <li>・ ワークシートや地図を用いたので分かりやすかった。</li> <li>・ グループの意見が面白かった。・ペアになったり班になったりして話し合いができて良かった。</li> <li>・ 王たちの考えが理解できたと思う。</li> <li>・ 多くの人の意見が参考になった。みんなで意見を出し合うのはすごくいいと思った。</li> <li>・ 国語でのグループ活動は初めてだったのでわくわくした。</li> </ul>	
分析と対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ グループ活動は、生徒にとって新鮮であり、他の生徒の意見を聞くことを楽しいと感じていた。</li> <li>・ 授業をする前は、王の考えについて理解していない生徒が6人いたが、話し合い活動を通して、自分の考えが深まるという効果が得られた。一人調べ、ペアでの話し合い、グループでの話し合いが機能したのではないかな。</li> <li>・ ワークシートが使いやすかったという評価がやや低い。考える視点などをもう少し付け加え、改良する必要がある。</li> <li>・ グループでの話し合いに慣れていないため、役割をきちんと決めるなどの手立てを取ることで、さらに話し合いが活発になると考えた。</li> </ul>	

### イ 到達度分析

評価	対応
A 12名 29%	古典に表れた人間の生き方や考え方などについて、文章中の表現を手がかりに考えさせる。図書館を利用して他の作品と読み比べさせる。
B 23名 56%	授業前に小テストを定期的に行い、漢文の基本的な句型を確認し、口語訳ができるように指導する。
C 6名 15%	漢文を訓点に従って音読できるようにさせる。返り点に注意して、指で押さえながら読むなど、確実に読むことができるようにさせる。

#### ④ 考察

##### ア 単元指導計画の工夫

学習指導要領における指導内容から「戦国時代における諸侯の生き方を考えることによって、漢文への興味・関心を広げる」ことを本単元の意義に位置付けた。このことを踏まえ、漢文の史伝に初めて触れることになる生徒たちに、「人物の生き方を考えることで、史伝のおもしろさを味わい、理解を深めること」を目標として設定した。

単元の目標を具現化するために「期待する児童生徒の姿」を5つの観点で設定し、レディネステストを行ったところ、次のような実態が明らかになった。1点目は、漢文を苦手とする生徒が半数以上いるが、「三国志」などの映画や漫画になっている理解しやすい史伝には興味をもっていること。2点目は、「鶏口牛後」という言葉の意味は理解しているが、その言葉になぜ王は納得したのかという点に関して理解が深まっていないことである。

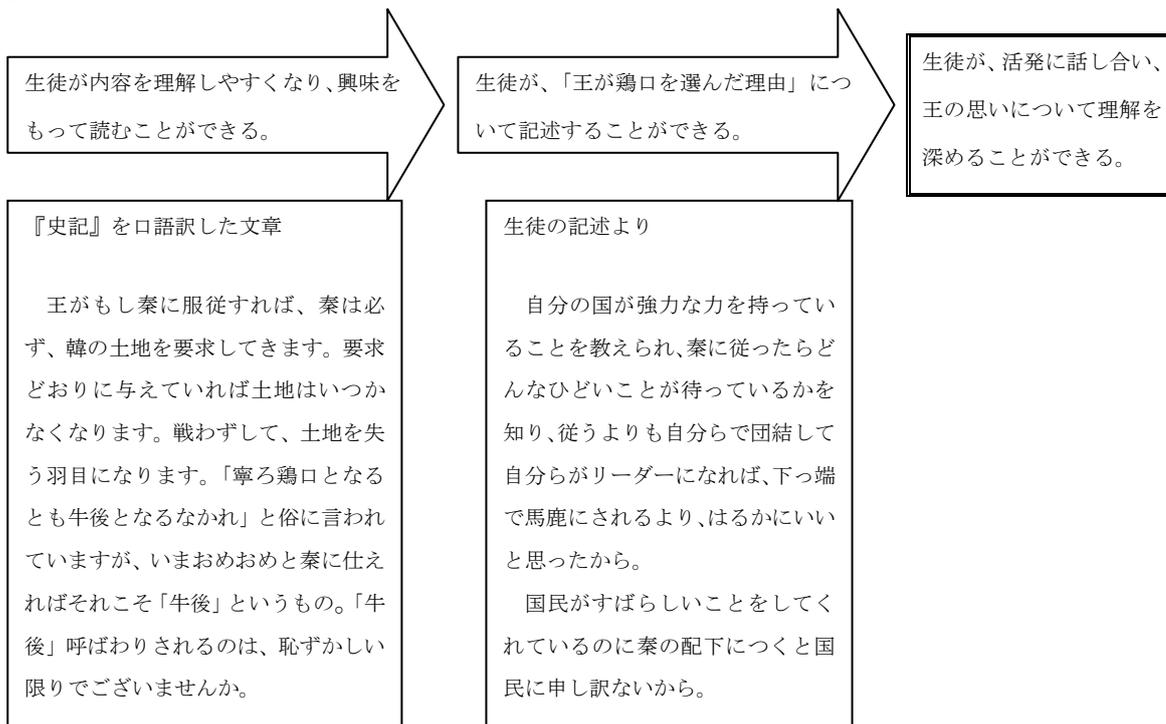
このように、生徒の実態を把握することで、次のような対応策を立案することができた。「昔のリーダーの思いを考えよう」という学習課題を設定し、主体的な問題解決や学び合いを通して、人物の生き方を考えること、また、補助資料として、口語訳された教材を用いることで、内容の理解をしやすくすることである。指導計画作成シートとレディネスシートを活用することで、生徒の実態に即した指導計画ができた。

##### イ 学習指導過程における工夫

###### (ア) 資料や教材・教具の工夫

「鶏口となるとも牛後となるなかれ」という言葉に納得した王の思いについて、さらに理由を深めるため、『史記』を補助資料として用いた。生徒が理解しやすいように口語訳の文章を用いた結果、興味をもって読むことができ、「王が鶏口（秦に立ち向かう）を選んだ理由」について自分の考えを書きやすくなった。

『史記』を口語訳した文章を用いることで…





### Ⅲ 研究の成果と課題

#### 1 成果

- 「授業力」を、「実態把握力」「授業設計力」「授業展開力」の3つの観点から整理し、調査、分析することで、子どもたちが生き生きと輝く授業を具現化するための視点を明らかにすることができた。
- 「指導計画作成シート」や「レディネスシート」を工夫し活用することにより、指導の目標や意義を明確にし、児童生徒の実態を的確に把握して課題を明らかにするとともに、課題への対応を考慮しながら効率的かつ的確に指導計画を作成することができるようになった。
- 教材や資料・教具の工夫、個に応じる工夫、板書の工夫、評価の工夫といった学習指導における手立てをとることによって、児童生徒の興味・関心を高めるとともに主体的な問題解決を促し、充実感や達成感を味わうことのできる授業を展開することができた。
- 「授業力」の実態調査と課題に対する研究をもとに、望ましい授業を構築するための手順や視点、留意点、手立て等を「授業づくりマニュアル」としてまとめることで、「実態把握力」「授業設計力」「授業展開力」といった「授業力」の構成要素を、授業構築の流れに合わせた具体的な形として表し、実際の授業実践に生かすことができた。
- 「授業づくりマニュアル」をもとに授業を構築し、主体的な問題解決や学び合いを目指した授業を展開することによって、児童生徒は問題解決に向かって互いの考えを練り上げ、自分の考えを深めるとともに、「分かる喜び」「できる喜び」を味わい「確かな学力」を身に付けていく姿が見られた。

#### 2 課題

- 「授業設計」「授業展開」「実態把握」というサイクルの中での、より効率的な評価を工夫することで、さらに子どもたちが生き生きと輝く授業を実現させていきたい。
- 5年間の研究の成果として作成した「授業づくりマニュアル」、「指導計画作成シート」の活用については、まだ十分とはいえない。よって、今後もさらに活用しながら、より使いやすいものへと発展させていきたい。

#### 〈 参考文献 〉

- 「小学校学習指導要領解説 総則編」（平成16年一部改訂）文部科学省／東京書籍
- 「中学校学習指導要領解説 総則編」（平成16年一部改訂）文部科学省／東京書籍
- 「小学校学習指導要領解説 算数編」（平成11年）文部省／東洋館出版
- 「中学校学習指導要領解説 国語編」（平成11年）文部省／東京書籍
- 「研究員研究報告書」（平成17～20年度）宮崎県教育研修センター
- 「学習状況の評価に関する手引き」宮崎県教育委員会／〈<http://www.miyazaki-c.ed.jp/kengakyo/hyoutakizyun/furonto.pdf>〉
- 「指導と評価」（平成20年8月号）日本教育評価研究会／図書文化社
- 「小学校学習指導要領解説 算数編」（平成20年）文部科学省／東洋館出版社
- 「中学校学習指導要領解説 技術・家庭科編」（平成20年）文部科学省／教育図書
- 「高等学校学習指導要領解説 国語編」（平成21年）文部科学省／〈[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_2.pdf)〉
- 「学校教育を中心とした宮崎の教育創造プラン～宮崎ならではの教育～」宮崎県教育委員会
- 「平成10年度研究紀要」都城市教育研究所